

東方神隠録

赤羽ころろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夏休み、地方に避暑にきた5人の少年少女。登山の途中に立ち寄った神社で次元の揺らぎに巻き込まれ・・・

目が覚めるとそこは日常≡非日常の幻想郷だった。

元居た世界に戻る方法はすぐに見つかりそうもない。少年たちは博麗の巫女 霊夢や魔法使いの少女魔理沙の力を借りて幻想郷での生活を模索していく・・・。

目次

日常の終わり、非日常の始まり	1
日常の終わり	1
幻想郷	7
家探し	11
職／食探し	17
EX・トリックオアトリート	23
スペルカード	46
黄泉返りの異変	
L／Re：GENERATION	60
L／Re：vive	65
L／Re：turn	76
L／Re：FLECTION	83

日常の終わり、非日常の始まり 日常の終わり

これからここに綴るのはもし現世に帰れたらみんなに話そうと思っていること。見たこと聞いたこと体験したことすべてを書こうと思う。笑われるかもしれない。でもこれは全て俺の、俺たちの身に起った出来事なんだ。信じられないとかそんなことあるはずないかと思うところも多々あると思う。

それもそのはずさ。なぜならあちらの常識はこちらの非常識なのだから。

夏。といっても今年は尋常じゃないほど熱い。地球温暖化が進んでるって実感できる。台風はいくつも来るし、それこそコマみたいな軌道を描くやつもいた。そんなだからどっかの馬鹿が

「じゃあさー！ 山に避暑しに行こうよー！」なんて言うから……。つて忘れてた。自己紹介がまだだったな。

オレは赤羽ころろ。歳は……まあ高校生って言うっておこうかな。珍しい名前だっていうけど親が決めたし俺にはどうもできないよな。初対面の人とかゲームのチャットとかでは「ころろ」

何て言われたりもするけどね。

ガタンゴトンツと一定のリズムを刻み続ける電車の音ももう聞き飽きた。持ってきた推理小説も二周目が終わったころだ。ふと窓の外を見てみると景色は都会から森へと変わっていた。

「おっし上がり！」

「あつマジっ？」

隣とその向かい側。四人で仲良くトランプでババ抜きをしている。どうやら最初に上がったのはラッキーらしい。

「はッ！ 見たかこれがラッキー様の力よ！」

すぐ調子に乗るのはラッキーの悪い癖だ。それなのに人前に出るとテンパってわけのわからないことしか言わなくなる。こないだだって吹奏楽部の演奏会の後の打ち上げで……

「えつと・・・その・・・み、皆さん！夏ですnee！」なんて言っちゃつてさ。まあ昔から変わらないけどね。

黄沢奇跡ラツキー。同級生で幼馴染。保育園からこっちずっと一緒。まあキラキラネームです。普通奇跡じゃラツキーとは読めないしね。本人はどうでもいいって言ってるけど。

「ラツキーに負けるとは何たる屈辱・・・」「んだとコラ!？」

とまあによるこのこういうやり取りも見慣れたもんだな・・・

翡翠による。まあ幼馴染でによるとは小学生からいつしよなんだけどね。俺らの中でおそらく一番知識が豊富。特に車や戦闘機の知識はものすごい。だからその話題に触れると半日は持つていかれる。だから俺たちの中じゃ触れないことが暗黙の了解なのさ。

「まあ次に上がるのは俺だけだな」

おそらくによるは数手先まで読んでいるのだろう。将棋やオセロなんかも得意だからね。けどラツキーの行動は読めなかったみたい。というか読めないよな普通。

アイツはKY（空気読めない）だからね。

「そんな訳ないでしょ！次に上がるのはアタシよ！アタシ！」

とによるに対抗心を燃やすのは透き通るような蒼色の髪の少女。ショートカットで右側の髪を三つ編みにし垂らし黄色のカチューシャを付けてアホ毛が立っている。

少女の名前は蒼樹アル。例に幼馴染。こちらも小学生から。運動神経は皆無だが頭は良い。たぶんここに居る誰よりもだ。

「によるはどうせ最後に上がるんでしょ？ いつもそうじゃん」

「なっ・・・今の言葉聞き捨てなりません・・・」

二人はにらみ合い火花を散らす。そしてその間に挟まれている男が一人。

「はい、上がりつと」

トライ。そう呼ばれている彼は無論小学生から一緒。本名は・・・今はいいでしょう。

「なんですとー!？」

アルとによるはとつきに立ちあがった。

「ふっ……能ある鷹は爪を隠すってね」

「キーむかつくうー！」「調子に乗んなよお！」

トライはそんなふたりを「あー負け犬の遠吠えなんて聞こえない」と一蹴した。まったくおめでたい奴らだなと思った。ころろが読んでいる小説。かの有名なシャーロック・ホームズシリーズの緋色の研究。さつき二周目と言ったが実際は家でも読んだりしているので数百回は読んだ。つまり飽きたのだ。

避暑と言ったって俺たちが住んでいるヨコスカだつてトウキョウから見れば十分田舎だ。それよりも田舎つていつたいどんなところだよ……」

「ところでラツキー、さつきからというより電車に乗った時から気になつてたんだけどさ」

「ん？なんか変かアル？」

はあ……と一つ溜息。

「その荷物、いったい何入れてきたのさ……」

ラックに載っているラツキーの荷物。その大きさは他の四人とは比べ物にならないくらい大きい。

「何ってプレイゲーマー3とプレイゲーマ4とプレイゲーマーポータブルとルーターとモデム、エトセトラエトセトラだよ」

つまりオンラインプレイができる環境をそのまま持つてきたということ。

「そりやそのくらいになるわな……」

「WiFiくらい宿にもあんだろうに……」

によるとトライは飽きれて言った。

そしてころろはまた窓の外を見た。さつき見てから十数分立っているが窓の外は木々が生い茂るばかりで民家の一つも見つからない。「なあアル、いったいどこに行くんだ？」

待つてましたと言わんばかりの表情でアルは胸を張つてこういった。

「それはですねぇ……」と続けようとしたとき電車のアナウンスがなった。

「次は神隠村ー、神隠村ー」

数秒の沈黙が五人を襲った。そして次に口を開いたのはころろだった。

ゴホンッと咳払いをして横目でアルを見ながら言った。

「あのーしんいん村って神隠しって書くんじゃ……」

「そうですか?」

アアアアアアアアとラツキーが絶叫する。

「俺マジでこういうの無理だから! なんでもっと先に言わねんだよアル!」

「だって言ったらラツキー来ないでしょ?」

「当たり前だろー!」

ころろはによるとトライを見た。

「はははは……神隠し、面白いじゃないか!」

と言つてはいるものの手がガクガク震えているにしろ。がそれに比べてトライは

「神隠しかー面白そうだなー」

と言つて同じでも全く手は震えてないしむしろ歓喜にあふれている。

そしてガタンゴトンッと一定のリズムを刻んでいた電車は足を止めて駅にプシューつとため息を吐くかのように止まった。

ころろ、アル、トライ、にしろ、ラツキーの順でホームに足を下ろす。ころろ達以外に降りる人はいないようだ。時刻表を見てみると次に来るのは三時間後らしい。

本当に田舎ってこんな感じなんだなーとあたりを見渡し思う。

「さあ、ここから歩きますよー!」

「歩くってどこを?」

アル以外の四名の頭にはハテナが浮かぶ。なにせ歩くべき歩道はおろか道路が無い。

「どこってここに決まってるじゃないですか!」

アルは右回りに一回転し両手をバンザイというようにあげた。

「この山ですよー!」

男子組はその山を一度見上げアルに視線を戻した。
そして三十秒ほどの間が空き、一斉に声を張り上げた。

「はああああああああああ!?!」

どれほど上ってきただろうか。ふと後ろを振り返るとさつき居た神隠村駅が点のようになっていた。

「さあ後半分ほです! 頑張っていきましょう!」

と張り切るアルをよそころろ以外の男子三人は今にも死にそうな顔をしていた。特にラツキーが。

「お、おいしいころろなんでそんなに余裕なんだよおく……」
まるでゾンビのように手を出してによろがころろに聞いた。

「忘れたか? 俺の家農家だぜ? お前らとは鍛え方が違うんだ」

と言ったが專業ではない。だがころろの祖父は幼少期からころろに耕運機などの使い方を教えていたためいつも学校の総合科目、特に畑関係は他人をはるかに凌駕していた。

「ホント……. にいどうなっただよをおお」

一人だけ人の二倍以上の荷物を持っているラツキーはもう汗はだらだらでこいつよく生きてるなという状態だった。

「余計な物たくさん持ってくるからだ」

ド正論をラツキーにぶつける

「だつてさあく」と言い訳が始まったのでころろは聞かないことにした。

「うーんですがさすがに疲れてきましたねえ……. ちようど休めそんな神社もあることですし一旦休憩しましょうか」

「神社? マップにや載ってないけど」

でもほら! とアルが指差すその先にはぼつりと寂しく神社が建っていた。

境内に入りおそらく賽銭箱があったであろう場所、その階段に五人は腰を下ろした。

「ふいふう生き返るう〜」

ラツキーは持ってきたペットボトルの水をぐいぐいと飲みほした。

「……. 博麗神社か」

鳥居にそう記してあった。もう何年も前に誰も来なくなったのだろう。コケだらけだった。

「この村の初詣とかにはたくさん来てたのかわくもごもご……」
「ラッキー、水飲み込んでから言いなさいよ……」

アルは呆れながら自分も水分補給をする。

「あのさー今言うのもなんだけどき、俺ら絶対山登りの恰好じゃないよね？山舐めてるよね？」

ラッキーは他の四人を足元から見上げる。

確かにそうだ。ころろはTシャツに赤パーカー、ワークボトムスという格好でラッキーはTシャツにズボン、腰には上ジャージを巻いている。

によるは半そでYシャツにネクタイ、ベストの前のボタンを外してジーンズという格好。トライはポロシャツ短パン。アルに関しては一番舐めているであろうスカートでYシャツという格好である。

「まあそうだな……」

ころろは周りを見渡して、

「さてとそろそろ行こうか。こんな小汚い神社からは早く出て……」そこまで言ったとき声が聞こえた。

「何が小汚い神社ですってえ？」

(女の声……!?) だがアルの声ではない。別の誰か。そしてその時アルがぼたりと倒れた。

「アル!?」ラッキーが駆け寄るがラッキーもその場で倒れた。そして立て続けによろ、トライもぼたりと倒れた。

「何がどうなって……!?!」

その時ころろの眼前が歪み始めた。

(くそっ目眩が)

そして目の前が真っ白になった時、また別の女の声が聞こえた。

「ようこそ。幻想郷へ……」

その声が聞こえた時オレの記憶は一度途切れた。

幻想郷

霧雨魔理沙、普通の魔法使い。

金髪ロングでウェーブヘアの少女。

捻くれ者の上に性格は悪いが根はまっすぐで努力家。

魔女っぽく黒い服に黒いトンガリ帽子。でも汚れが目立たないからなわけで別に魔女っぽくしようとしているわけではない。

魔法の森で自宅兼魔法関係の何でも屋の霧雨魔法店を開いている。立地が悪いうえに魔理沙自身家を留守にすることの方が多く

繁盛していない。ちなみに蒐集癖があり魔導書（グリモワール）やらマジックアイテムやらが大量にあるが本人が片づけられない正確かつ集めることに意義を感じているため、まったく使用されずに放置されている。そして森のキノコに誰よりも詳しい。

そんな魔理沙は今、こんなことが珍しいわけではないが今日はかなり珍しい事態に遭遇している。

「うむ……これはあこの家の主に相談しなくちゃだな」

とその主のもとに走っていった。

「おーい霊夢ーお前の境内が大変だぞー」

と叫んだ。するとドアを荒く開け一人の少女が出てきた。

「アンタうるさいわよこんな朝っぱらから！」「おい霊夢、朝って言うたっつてもう昼だぜ？」

うるさいともう一度言っつて霊夢は

「で、大変なことって何？ これ以上変なことになって参拝者が減つたらどうすんのさ」

「こっちだよこっち」

魔理沙が事態を把握したのは約三十秒前。いつも通り霊夢の家、すなわち博麗神社でお茶を飲んでいた時。

「ふいっふいっいいいお茶だぜ。さてと今日も霊夢宛の依頼を横取りするとしましようか」

自分の店、霧雨魔法店は滅多にというか全く来ないので魔理沙は霊夢の仕事を横取りして生計を立てている。

霊夢本人も面倒くさがりで紅魔館事件などは魔理沙が調査したりもした。

お茶を飲みほしたところでドドツと大きな音がした。境内の方からだった。

「なんだ？ 戦いか？」

幻想郷じや小競り合いなんて日常茶飯事なのだ。特に雪の妖精チルノとか。

魔理沙が見に行ってみると魔理沙と同じくらいの年の男女が四人倒れていた。

(何だオレ生きてるのか?)

すると声がした。

「ほら見ろよ今日はこんなに」「ふうーんこんなに一気に来るのは珍しいわね」

(女の声……後の奴はさっきの)

ぼんやりとした意識の中でころろは薄く目を開けた。そこにはトンガリ帽子を被った黒服の少女と大きなリボンを頭に付けた巫女服の少女がいた。

「?目を覚ましたか?おーい聞こえるか?」

「(こ)……(こ)……ど(こ)……だ?」

ころろは今出る精一杯の声で黒服の少女に聞いた。

「ここは幻想郷だ。お前大丈夫か?」

「幻想郷……?」何かを言おうとしたがころろはそこで意識を失った。

次にころろが目を覚めたのはどこかの和室だった。

「うっ……オレ……」「お、起きたか? おーい霊夢ー」

上体を起こしてあたりを見渡す。

「(こ)……」

「? ああここは博麗神社だぜ?」

博麗神社……ころろ達がついさっきまでいた場所。そして、

「! アルは? 他のみんなは無事か?」

「ああ、お前ら四人とあと一匹」

一匹？少し気になったがそれは後回しにしてまずは状況把握を優先した。

「あの君の名前は？」

と黒服の少女に聞くと待ってましたと立ち上がり、

「私は霧雨魔理沙！ 普通の魔法使いだぜ！」

「魔法………使い」

コスプレか何かの一種か？そこどころろはもう一つ聞いた。

「さっき言ってた幻想郷って？」

「ああ、ここはだなあちら側、つまりお前らがいた世界と陸続きな場所でだな。本当は結界で隔離、つっても物理的な結界じゃないが、………うーん何と説明していいのやら」

魔理沙はあたまをぼりぼりと書いて言った。

「つまりここは結界で隔離された辺境の場所だ。異世界でもなんでもないから安心しろ」

「いや無理でしょ」

すかさずころろはツツコミを入れる。

「あのそれで俺らは帰れるのかな？」

「無理だと思うぜ？ そう簡単にはいかない。それにお前らがこっちに来れたのだって奇跡中の奇跡なんだぜ？ 簡単に言えば神隠しにあつたんだお前らは。ほら神隠村って名前だったろ？ あつちの博麗神社があるところ」

本当に神隠しにあつたのか俺たち………でも、なんで？

「あー起きた？ 他のみんなも起きてるわよ？ 居間にでも集まつて。つたく紫のやつまた厄介ごと持ちこんで………」
「？なあその紫ってやつ？」「ああ、アンタたちをこっちに連れてきちゃった奴よ」

「なっ………何があつたのトライ!?!」

「いやなんか目が覚めたら体が縮んでて鏡見たらニワトリに………」

あ、でもその前髪は一緒なのね。ころろは苦笑した。

「さてと、どうやらみんな集まったようね。じゃあ話しましょうかね。この世界のこと」

そこから三十分ほど霊夢の話を聞いていた。昔、幻想郷はただの人間離れた辺境の地と言われていた。妖怪などの人外と僅かな人間たちが住んでいたが普通の人間は近づかず妖怪退治を生業とする者たちが住んでいた。そして五百年ほど前に妖怪賢者・八雲紫が人間の勢力が増して幻想郷の社会のバランスが崩れるのを危惧し、「幻と実体の結界」を張った。そして百十数年前に外の世界との往来を断つために「博麗大結界」が張られた。それを管理しているのが博麗の巫女で結界の効果は常識であり、こちらと外の世界の常識を分ける。外の常識をこちらの非常識の側に置き、外の非常識をこちらの常識の側に置くというものである。

「つまり私たち帰れないってこと……?」

「まあ帰れなくはないけど簡単には無理ってことよ」

はあーつと全員がため息をつく中、なぜかラッキーだけは平然としていた。

「いや〜よかった。よかった。プレイゲーマー持ってきておいてよかったぜ」

「良くない!!」

全員が立ち上がって叫びその後またはあーと大きなため息をついた。

「まあ帰れるようになるまでは面倒見てあげるからさ。まずは家探さないかね」

「え? ここに住んでいいんじゃないの?」

「はあ? 何言ってるの。アルはともかくアンタら三人と一匹は住まわせるわけないでしょ」

ころろは天井を見つめ、

「家か……」

そしてころろ達の家さがしが始まった!

家探し

「家さがしか……」

「ころろは天井を見上げてつぶやいた。

「ここに、幻想郷に来て三日が経った。家が見つかるまではころろ達の面倒を見てくれると言ってくれたので甘えさせてもらおうことにした。」

「普段ならころろも断るのだが右も左もわからぬ場所で一から生活しようとするのは難がある。」

「五人で住む家なんてあまりないですよねー」

「アルも天井を見上げてつぶやく。」

「ねえ魔理沙ーここらへんにいい家無いの？」

「うーんそうだなーあそことかどうだろ」

「みあげた家は3LDKの一軒家。幻想郷には洋風の建物というと紅魔館や魔理沙のうちなどである。つまりあまり浸透してないのだ。」

「3LDKか……」

「うーんとみんな考え込む中、魔理沙は

「なあ3LDKってなんだ？」

「LDKはリビング、ダイニングキッチンの略。3は部屋の数」

「ふーん今の日本はそんな表し方するのか」

「ほうほうと納得する魔理沙をおいといっているころろは

「狭いよな」とみんなに聞くと「うん」と満場一致で賛成された。

「だがよー5人で住める家なんてなかなかないぜ？」

「ねえ魔理沙、幻想郷でそういうの詳しい人居ないの？」

「うーん家に詳しい奴はいないけど幻想郷の情報やなら居るぞ」

「家ですか？　そうですねえ」

「手に持った鉛筆で頭をかきながら射命丸文は言った。

「お前なら何か知ってると思ってるさ」

「おおお！魔理沙さんが私を頼ってくれている!? これほどうれ
すいことは無い！」

メンドクサイ……とその場の全員が思った。

射命丸文、幻想郷の妖怪の山に住む鴉天狗。ブン屋で「文々。新聞」
を発行している。生真面目で融通が利かない。強い者の前では礼儀
正しいが、自分が弱いとみなしたものには強気に出る。

が、取材相手には常に礼儀正しい。頭脳明晰で非交戦的。思考能力
は非常に高く人の何倍もの速さで考えをめぐらしている。らしいが
今の彼女はそうは見えない。

「あ、じゃああそこなんてどうでしょう？」

「ほーまた豪邸で……」

見上げた邸宅は豪華な洋風装飾が施されている。

「すごいところですねここ！ 湖もあってキレイ！ ねえ魔理沙
！」

「う、ああ……」

魔理沙は少し困惑していた。

「？ 魔理沙どうした？」

ころろは魔理沙が何かおかしいので聞いてみた。

「いや……文、ここってさ……」 「はい、幻想郷一の
大豪邸、紅魔館です！」

紅魔館、吸血鬼レミリア・スカーレットの邸宅。魔理沙から聞いた
話によると人間のメイド長、十六夜咲夜が仕切る多数のメイドがいる
らしい。

「紅魔館ってあのオチビさん達がいるっていう……」

「あら？ あなたも十分チビじゃなくて？」

紅き豪邸から姿を現したのはまだ七、八歳の少女。羽が生えてはい
るが。

「ああ、レミリアちよつと見させてもらってるぞ」

「ええ、いいわよ魔理沙。なんならそのゴーストの子たち住まわせ
てやってもいいわよ？」

レミリアは薄く笑っていった。

「本当か!？」

ころろは声を上げて喜んだ。

「執事とメイドとして仕えるならね」

自分たちの執事姿やメイド姿を想像して一度は承諾しかけるもレミリアや咲夜のスパルタぶりを想像してみんなの顔から血の気が引いていき、

「やっぱ嫌!」

と全力で拒否った。

「あら、私たち優しくしてよ?」「信用できませんよ! 笑ってるし!」

そこへ「あ、魔理沙だ!」と七色に光る大きな翼を広げて豪邸から出てくる幼女がいた。

「ようフラン! 邪魔してるぜ」

幼女はレミリアと違い見た目通り幼い無邪気な少女だった。これにラツキーとよろがとつきに反応する。

「ふむ、俺の中ではありだな」「いやラツキーそれは時期尚早というものぞ。おれはやはりレミリア様推しだ」

くだらない議論の末によろは、

「レミリア様! オレ、ここで週三日で働いていいでしょうか!？」

「ええ、いいわよ。咲夜に言っておくわ。あなた何か得意なことある?」

「はっ! 車と戦闘機に詳しいであります!」

「ふむ、なにも役に立たないわね。まあいいわ。あなた色々物知りそうだし。家が決まったら来なさい。そうしたらちゃんと給料あげるから」

とによろは早速幻想郷での仕事を見つけてしまった。

「おい、によろ今日は仕事探しじゃなくて家事がしただぞ?」

「いいじゃないか! 後でどうせ探すことになるんだ! あっちは副業で頑張るさー!」

目を輝かせてによろは言った。

「ねえ魔理沙ちよつと遊ぼうよ!」

「ん？　しょうがないな。よし、分かった。いいぜ！　文、そいつら頼むわ」

「ほえっ!?　ちよっとお魔理沙さん！」と呼びかけたがもう魔理沙はフランと二人だけの世界に入っていた。

「遊びだからって手加減はしないぜ？」「そうそう、そうじゃなくっちゃー！」

家を壊さない程度にねとレミアは少し注意しただけで紅茶をすすり始めた。

「あーもうこれはダメですねー……しょうがないですねえ私が案内しましょうか」

その頃もうすでに上空では鮮やかな火花が散っていた。

「いつそのこと家建てたらどうです」

文は少し眠そうにあくびをしながら言った。

「いや、家建てるって半年はかかるぞ……」

「何言ってるんですかによるさん！　ここは幻想郷ですよ？　家なんて

建築魔法でちよちよいのチョイですよ！」

確かにそうだ。こちらの常識はあちらの非常識、つまりころろ達がいた現世では無理、不可能と言われていることが幻想郷では有り得る。

「それは最終手段だな。文、とりあえず残ってる物件全部見せてくれるか？」

「そうですね。わかりました。じゃあ行きましょ」

それからころろ達と文は幻想郷の残りの物件を回ったがやはりめぼしい物件は無かった。

「やっぱ建てるしかないかねえ」

「じゃあラツキーどうやって材料調達するの？」

「アル、お前バカだなー。そりゃ木を切ったりして……ってありや？」

そこでラツキーはあることに気付いた。

「俺ら道具ないじゃん」

そう何も無い。あるのはゲーム機と洋服、その他日用品のみ。トライが簡易的な工具セットを持ってはいたがやはり家を建てれるような道具は無かった。

「馬鹿なのはアンタでしょ?」

「うるせえな……て、ころろ何やってんだ?」

ラッキーが見るところろろは大きな紙に何やら書いていた。

「家の設計図」

「だから道具は無いつて……!?」

「一から作るんじゃないよ今、目の前に建ってる家をこれから徐々に改築するんだ」

ころろ達の目の前に建っている物件、その家は見えてきたものの中でまだまじだった家。3LDKだが庭付きでキッチンも割と最新。らしい。

「増築ですかく考えましたねえ。」

「ああ、によるとアルは紅魔館と博麗神社で預かってもらえそうだからこの家にはしばらく俺とラッキー、それとニワトリ一匹で住むよ」
「ニワトリ言うな」

ころろの肩に乗ったトライが不満そうな顔をして言う。

「そのまま別に暮らすって選択はないのですか?」

「ないね、まったく知らない土地で一人にさせるなんてできないさ。それが俺の意志だ」

「……………そうですか。それではですねこの家の購入代として大体こんくらい……………」

ぱちぱちつとどこからか取り出したそろばんで文はうふふつと笑いながら計算を始め、

「このくらいいただきます!」

「ツイ、一千万人さん!?!」

そのそろばんにはたった一つだけ珠がはじかれたおり、文は一の位を示す場所に指を置いていた。

「いやいや、こんなボロ家でそんなするか!?! ぼったくりだろ!」

「いえいえ、あなたたちがいた世界とは物価がちがうんですよ物価が

！」
そしてごろろは渋々承諾書にサインをした。「赤羽ごろろ」と。

職／食探し

幻想郷にきて早、四日。生活に慣れてきたとは言ったものの正直大変の一言である。食材や生活必需品は霊夢や魔理沙、文やスカレツト姉妹から多少貰い受けているがいつまでもそれに甘える訳にはいかない。そろそろ職を探さないとないと思いつつ今日この頃である。「なあ、ラツキーは何やりたい?」

「ん?ゲーム」

「そういう意味じゃない。仕事だよ仕事」

んーというもののラツキーはゲームに集中していて話が進まない。こうなったら……

「ラツキー君、いくら君が馬鹿であろうとも必ず働かざるを得なくなることを受けてあげようか。働かないと電気が通らなくなつてゲームが……」

「働くつ働くつ! さあお仕事探しましよー!」

馬鹿は気楽でいいなと思った今日この頃でもある。

「今度は仕事ですかあ? あの、すいませんけどここ新聞屋なんで職探しなら他行つてくれませんか?」

「頼むよ文ー。お前幻想郷の事色々知つてんだろオ? な? 紹介してくれたらちよつとだけとお礼も出すからさー!」

「わかつたやりましょう」

こいつそういうのには目が無いな。つかがめついな。

「やっぱりここでしょー!」

深い森を歩いて来たその場所にはぽつんと家が建っていた。

「おい文、ここって魔理沙ん家だろ? 第一本人居ないし」

おそらく今日も霊夢のところだろう。誰一人として客が来ないらしい。まあここまでの道のりが壮絶だったからかもしれないが。

「やっぱりここで働くのは無理ですか?」

「無理だろ」

「ふむ、外の世界からねえ」

ここは香霖堂。森近霖之助が営む古道具屋である。

「スゴイいろいろなものがあるんですね。あ、このティーカップとかいいですね」

「あ、それ非売品よ?」

「へ?ここに置いてあるのって全部売りものじゃないんですか?」

「うん、売り物なのは使い方のわからないものだけね。そこら辺にあるのは私のものさ」

ラッキーところは顔を見合わせて、

「別のところ行くか」「ああ」

「やっぱり外来人だとダメなんですかねエ?」

文は空を見上げてつぶやいた。

「そうだなー俺らはこっちの生活に慣れてきただけで常識には慣れてない」

「ああ、こっちの人達って変人多いよな」

(ラッキーが言うのか)

(ラッキーが言うのか)

「? 何? オレ変なこと言った!?!」

すうっと大きく息を吸い込んで文は「さあ! 次行きましょう!」と急に張り切り始めた。

「……………変な奴」「だからお前が言うなっつての」

次の事業所へ歩いてる最中にあ!つと文は何か思いついたという風にころろを引き留めた。

「いつそのこと家で働かないですか!?!」

「えーいいよ。なんかブラックそうだしちゃんと給料払わなさそう」

むつと頬を膨らませて文は

「失敬な! ちゃんと払ってました! 今は誰もいませんけど……………!」

「いやなんの自慢にもなってないから」

そうこうしているうちに目標の事業所についた。すると巫女姿の少女が出てきて、

「どうぞご参拝お願いしますーってころろ達か……」

その少女はアルだった。はあつと肩を落として戻っていった。

「いや、俺らにや無理でしょ……」

「ですよねえー」

その後、人間の里中を回ったがやはり雇ってくれるところはなかった。あとは妖怪たちのところにも行ってはみたもののミスターの夜雀庵

や紅魔館などちよつと無理あるものばかりだった。

そして家に帰ってきた。

「お邪魔しまーす」「いや何勝手に上がってんだよ」

おおーと家中を駆けずりまわる文。やはりはじめてきた家は探検したくなるのは人も妖怪も変わらぬようだ。

「ころろさあーん！ 私いいこと思いつきましたあー！ これですよこれ！ これ見て思いついたんですー！」

文が手に持っていたのはころろが持ってきた漫画。高校生が人助けをするために起業する話だ。

「そっか、めぼしいものが無ければ俺らで作ればいいんだ！」

起業。なんで思いつかなかったんだ！自分に合わないところが無ければ自分に合うものを作ればいい。無論今までころろ達がいた現世では無理だろう。そこまで現実には甘くはない。

だがここは幻想郷。あちらの「非常識」はこちらの「常識」である。「で、ころろさんどうするかい？ その名前とかさ。何やるとか決めないと」

「そうだな……ここじゃいろいろやれた方が楽かもな。よしこれからうちは何でも屋だ！」

きよとんとしている文。「何でも屋ですか？」

にっこころろは笑うとやることの概要を説明し始めた。

「うちとはとにかく何でもやる！ ゴミ拾いから異変解決までなんでもな！ どんな危険なことでもラッキーがやってくれます！」

「ゲッオレ!」「異変解決もですか!？」

そしてところは続ける。

「依頼料は要交渉！ 分捕りはしない！ それこそ文みたいにはしません！」

ほうほうと納得するラッキーの隣で必死に「いやいや分捕ってませんって！」と否定する文。その顔には汗がだらだらと。

「そして店名は何でも屋N i k o l a 商店！ によるのN、ころろのK、ラッキーのL、アルのAでN i k o l a！」

「………トライはいいのか？」

「アイツにはうちの看板ニワトリになってももらいます」

何かを感じ取ったかのように二階からコケーと鳴き声が出た。

そして翌日、

「いいぞー」「よし」

ころろ達は屋根を見上げた。

「なかなかいい面構えじゃねえか」

「よし何でも屋N i k o l a 商店スタートだ！」

こうして四人の少年少女と一匹の何でも屋が始まったのである。

「こないね依頼人」「そうだなー」「コケー」

ころろとラッキーとトライは居間で大の字になって寝っ転がっていた。によるは紅魔館、アルは博麗神社でそれぞれお仕事中である。開業して二日。今のところ客はゼロである。人間の里にチラシは置いてもらっている。ちなみにチラシの製作は文であり多少盛られている部分もある。そしてお察しの通り文がチラシのデザイン、印刷をタダでしてくれたわけなので売り上げの一部は文に行く。

やはり幻想郷も甘くはない。それでも税金とられないから現世よりはかはマシか。

「やつぱり来ないかなー」ところろがつぶやいた時だった。ガラツと扉があく音がした。

「すいませーんこことって何でも屋ですかー？」

人間の里の少女だった。

「そうだけど依頼かな？ 内容は？」

ころろというよりかラツキーとトライも目をキラキラさせて詰め寄るので少女は少し引いていた。

「えつと……ちよつと手伝ってほしいんだ。うちのお店を」

少女の名前はサチ。人間の里で団子屋を家族で営んでいる。

「ほらそろそろお盆じゃない？ それでお供え物として団子が売れて品薄になっちゃうのよ。それで人手が足りなくて」

幻想郷には学校というものは無いらしい。だから現世では小学四、五年生のこの子も実家の手伝いをしているらしい。読み書き程度は家で習ったみたいだ。

「そっかあ。 そういうことなら了解だ。 うっしNikola商店の初仕事だ！ 気合入れていくぞー！」

応！つと気合を入れて臨んだもののニワトリのトライは邪魔でしかなかった。

「……邪魔なんだけどこのニワトリ」「ニワトリ言うな！」

うおえつしやべつたあ!?!つとびっくりするサチ。まあ当然だな。

黙々と団子を握るところの横でラツキーが苦戦していた。

「おいおい、なんでそんな器用なんだよお前……」

「お前が不器用なだけだ。 アルは服作れるしによろは機械も直せる。お前さ何か無いの？そういうの」

うーんとしばらく間を開けてラツキーは

「みんなを笑顔にできる」「それ役に立たないな」

約三十分後、団子は目標の数に達しころろ達は休憩に入った。

「いやーこうやってなんかするのもいいもんだな」

ラツキーはサチに入れてもらったお茶を美味しそうに飲む。そしてすぐに煎餅を頬張る。

「ねえねえ、二人はあつちで何をやってたの？」「三人な」とすかさず

トライは注射を入れる。

「普通に学生さ。毎日学校通って部活行って……」とそこまで言ったときラツキーは顔を顰めた。

「ラツキー？」

サチは不思議そうにラツキーの顔を覗き込む。

「……最近まではね。数か月前にあるテロリスト集団の行動が原因で世界は大規模な戦争になったんだよ。それから日本も巻き込まれ始めた」

ころろはラツキーの後に続けて話し始めた。

EX. トリックオアトリート

幻想郷に来てもう三か月が経つ。まあ色々あったけどここまで順調。今のところの方針は「外」には帰らずここで暮らす。そうやってみんなで決めた。今日はアルによるもいつものバイトだし、ラツキーはさつきサチから頼まれて魔理沙の家まで行っている。今暇なのはころろだけ。・・・と一匹。

「暇だなー。かといってゲームやる気分でもないしなー」
「コケー」

最近何言ってるかわかるような気がする・・・。ころろも遂に鳥の言葉を理解できるようになったらしい。

「スペルカード鳥符ハミングバードってか？」

「あん？」

忘れてました。このニワトリ喋るんです。

「なあころろランプしようぜ」

「おお、いいぜ」

そしていざ真剣衰弱をやろうとランプを広げたが、

「・・・え？ トライさんどうやってやんの？」

「は？ 手でやるに決まってるだろ」

「いや手って・・・ぷっそれ手羽先でしょ？」

「いや意外と取れるんだぜ？」

そしてシュバツと取って見せた。

「うお!! それどうなってんだ？」

「もう、慣れた」

ほえーつと感心しているとガラツと玄関が開きラツキーが帰ってきた。

「お疲れ。あれ？なんでそんなぼろぼろなの？」

「いや、行く途中にチルノに喧嘩売られたから買ってやってちようどクーリングオフしてきたところだ」

ようは売られた喧嘩を買って返り討ちにしたってことか。ころろが納得していると

「ほい、お土産」

その手にはチルノが首根っこ持たれて差し出されていた。

「今日の夕飯」

「いらねーよ!」

「アタイまだ死にたくないよー」

三十分後チルノはそそくさと帰りまた暇になった。

「あぶない、危うく妖精を捕食するところだった」

「ああ、神は喰らったことあるが妖精はまだだったからな。どんな味するのか楽しみだったのに」

「マジで食べるつもりだったのかよ」

そこへまたドアが開いてにやろが帰ってきた。

「あれ今日は早いな。なんかあった?」

「いや今日はレミリア様はお出かけでフラン嬢は魔理沙と遊ぶつて。でお暇させていただいたわけです」

「あいつの遊びは地獄に等しいからな」

ころろ達はスペルカードを会得して新たな事業に取り組みだした頃遊びと称してレミリア姉妹に殺されかけたことを思い出した。

そこへまた玄関がバンつと開き今度はアルが帰ってきた。

「はあい、暇そうね。ちよつと頼みたいことがあるんだけど」

帰ってきたというより博麗神社からの依頼を持ってきたというアル。

「へ? 頼み?」

「待て待て待て、なんで俺らが境内の掃除なんかしなきゃいけないんだよ」

ラツキーはぶつぶつ言いながらも箒で落ち葉を掃いている。

アルに頼まれ博麗神社にやってきたころろ達は来ていきなり霊夢に箒を持たされて掃除をさせられて今に至る。

「おい、霊夢このくらいお前でやれんだろ」

ラツキーはお賽銭箱の隣でまったりとお茶を飲んでいる霊夢に

言った。

「いいじゃない、あなたたちこういうのが仕事でしょ？」

「だがよーもつとこう異変解決とかさー」

「ほらラッキー口動かしてる暇があったら手を動かさせ手を！ それにそんなしよつちゆう異変が起きてたら身がもたないわよ」

さすがアル。巫女としてバイトしているだけのことはある。テキパキと落ち葉を集めている。

「そういえばすっかり秋だなー」

「そうだなここに来たときは夏だったのに」

によるところろはここに来たころを思い返す。

避暑に来ていたはずが神隠しに遭い幻想郷に来てしまい住むことになった。

「あ、もう十月も終わりだしさあれやろうよ！ ハロウィン！」

「はろういん？ ああ、あのお菓子あげなきや悪戯するぞってやつね。

うちでもやるわよ？ 西洋の妖怪がやりたいっていうもんだから」

「博麗神社でそんなことやつていいのかよ……」

ころろが霊夢に飽きた時だった。急に視界が白に染まり数秒色彩が混ざり合い黒に暗転した。

「え？……みんな？」

霊夢は目の前でNikolaたちが消えるのを見た。

「また紫ね。 困ったもんだわ。 あの子たち帰ってこれるかしら」

特にあわてる様子もなく霊夢はもう一度お茶をすすった。

(この感覚は幻想郷に来たときの感覚だ)

謎の「揺らぎ」に巻き込まれたころろ達は幻想郷に来た時と同じ状態で倒れていた。

(俺たち帰ってきてしまったのか？)

自分たちには嬉しいが嬉しくない展開が待っている。そんな感じがして自分の嫌な予感が当たらぬように祈り目を開いた。

「あれ？」

目を開いたころろが最初に見たもの、見慣れた神社であった。なに

も変わったところもない。

「ただの眩暈だったのか？」

「ふえ……」

ラッキーがおかしな声をだし目覚めた。続いてによるとアル、トライも。

「俺ら寝てた？」

「わからない。とにかく一度帰ろう」

こうしてころろ達一向は家に帰ることにした。帰る途中、町がいつもと違う雰囲気だった気がするがおそらくハロウインの準備だろう。そしてころろ達は家についた。が、

「おいおいおい、どういうことだ!？」

ころろ達が見上げたそこには帰るべき場所、ころろ達の家が無かった。というよりある形跡すらなかった。

「なんで家が無いんだ？」

「わからない、でもここは確かに幻想郷だ」

そこころろ達が立っているここはいつもの幻想郷のはずなのだ。

「あれ? どうしたんですか?」

唐突に話しかけてくる人がいた。否、妖怪の少女だったが。

「……? みすちーか?」

「え? はい、そうですけど」

おそらく屋台の帰りだろう。その後ろには夜雀庵ののれんがかかった屋台があった。

「俺らの家が無いんだ! なんか知らない!？」

「え!? ええっと……」

みすちーは戸惑っていた。そして衝撃の事実を告げる。

「貴方たち誰ですか……?」

「ツ!!？」

告げられた真実を受け入れられるわけもなくころろは、

「えーと今日は嘘をついてもいい日だっけ?」

「いや違うでしょ。みすちー嘘だよね!？」 冗談だよね!？」

「ええとロリコンの方ですか?」

「あつてるけど違う!! 嘘だと言つてよみすちー!」
と叫び膝を抱えて泣き出した。そして全員の腹が空腹を知らせたのも同時だった。

「ええっと、なんかわけありそうですね。慣れてはいますが……：：：：屋台でなんかお食べになつてください」

ウナギを食べながらころろはみすちーに今までの経緯を話した。

「つまりその揺らぎに巻き込まれて起きてみたらいつもの幻想郷だったということですね」

「そうなんだよー。だからみすちーも冗談で言ってるんですよ?」

「だから違いますって」

みすちーの反応からおそらく本当なのだろう。だとするところろ達は今どういう状況に置かれているのか、今知りたいのはそこだ。

「ねえみすちー、この幻想郷で外から来た人って何人いる?」

「そうですねえ。うちの従業員と居候が外から来た人たちですかね。女の子なんですけど日本の人じゃないんですよ。で、あとは

どうやらこのことを嗅ぎ付けて根性で幻想入りした正真正銘の変態とかですね」

「日本の人じゃない?」

「量子力学的なことだな、それは」

によるの眼がキララんと光った。ここぞとばかりにペラペラとしゃべりだした。

「だとするとここには俺たちが来ていない。それってつまり……：：：：」

「ああ、おそらく並行世界だろう」

世界は多次元構造とも言われており今自分がある世界と同時進行で他の次元の時が進んでいるとも言われている。それが平行世界。こちらから観測することもできずあちらからも観測されていないため「あるかどうかかわからないが無いともいえない」というのが並行世

界である。

例えば右に行くか左に行くか迷った時、自分は右に曲がったが別の世界の自分は左に曲がりたりする。ある世界のころろはもう死んでいるかもしれない、ある世界のころろは恋人がいて順風満帆の生活を送っているかもしれない、ある世界のころろが住んでいる世界は争いが無い平和な世界かもしれない。つまり別の世界のころろ達は幻想入りしていない可能性も十分ある。ころろ達が今いる幻想郷は数ある平行世界の中で「ころろ達が幻想入りしなかった世界」のうちの一つに紛れ込んでしまったということである。

「これって戻れるのかな・・・?」

「どうだろうな。タイムマシンで行く世界も一種の並行世界であるとも言われているしな。もし仮に揺らぎに巻き込まれたとしても元の幻想郷に帰れる保証はない」

万事休す、八方ふさがり、どんな呼び方でも構わないがとにかく帰る方法が無い。

「ころろのスペルカードで何とかならないの?」

「おい、アルそういうのはもつと早く言えよ! もう三分たつちやつたじゃねえか! まあもしこれが運命だったら無理だけどな」

ころろのスペルカードの一つ「タイムアベレイト時間操作」は「運命」に干渉しない限り三分以内であればなんでも好きにいじれるというチート級の技。時間を操れる咲夜と違いこちらは条件が多いものの使えればかなり強い。

例えば事故に遭う場合、事故に遭うという運命は変えられないが遭う方法は多少変えられる。その日の昼食などは変えられる。逆に人の死は変えられないなど運命というのは実に曖昧である。

「ころろさん達スペルカード使えるんですね」

「ああ、地獄のような修行だったけどな・・・」

ころろ達の顔を見てみすちーはどれほどきつかったものか察したらしい。

「まったくお菓子あげなかっただけでこのいたずらか冗談きついぜ」

「いやラッキー、お前の冗談の方がきついぞ」

はあ、とため息をつくNikolaをみてみすちーはある提案をした。

「じゃあ皆さんしばらくウチに来ますか？」

みすちーのその思いがけない提案にころろ達はつい「はい？」と返してしまった。

結局みすちーの夜雀庵にしばらく居候することになったころろ達。やはり本店の中は広がった。

「おーここは変わんないな」

「ああ、どうやらそこまで遠くない平行世界らしい」

ラッキーはよろの言っていることが理解できていないようだった。そんなラッキーに呆れるによるは、

「えーとな……自分が本来居る世界をゼロとするならばそこから離れば離れるほど違う結末が起きている。逆にゼロに近ければそこまでこれといった大きな変化はない。おそらくここは隣かその隣あたりだな。まず幻想郷に来ること自体が分岐かもしれないし」

「つまりあれか？俺らがいる世界が必ずしも本来のルールじゃないってことか？」

「ああ、それはたぶん誰にもわからない」

によるはかなり険しい表情で行ったのだが当のラッキーは「じゃあ違う世界の俺はモテモテハーレムだったりするのか」

そして気付く、

「はっ！　もしやロリっ娘たちに囲まれてウハウハーレムだったり！」

「アホー！」「ゴホっ!？」

すかさずラッキーの後頭部にアルのチョップが直撃する。どうやらクリーンヒットだったようでラッキーはその場でうめきながらしゃがみこんだ。

「あ、いらっしやいませー」

そこへ澄んだ青い瞳の少女が出てきた。

「あ、クエスちゃん。この人たちちよつとわけありだから家に居候兼従業員として働いてもらうことにしたから」

「従業員っ!？」

「あら、そうなんですか!? でも元からいる居候と違って皆さんスゴイ働いてくれそうですね!」

聞いてない……。無論タダで居候させてくれるなんて思っていないがまさか従業員とは……。しかもこの世界のみすちー、割とキツイ気が……。とそんなことを考えていたころろろは自分は居候の身だ!とそんな考えを頭の中から消した。が、この数分後まさか上には上がいるとは思いませんでした。

「いやークエスちゃんかわいいねエ」

「そんなことないですよ」

アルの眼はギラギラと光っていた。その目はまるで獲物を狩る獣のようだった。

「ああ、可愛いという意見には賛成だ! それにそのボディも俺にはドストライクだ……」

そこまでラツキーが言ったとき周りの空気が変わった。

「えーつとお……」

「ラツキーさん、セクハラで訴えますよ」

「す、すみません……」

そしてまたラツキーは膝を抱えて座り込んだ。

「まったくこれだから男の人は……」

「いや、俺らは違うからね!? 健全よ!？」

「全くだ。それに俺の眼中にはレミリア様しかない」

「いやによろはダメだろ」

アルのツツコミはこの幻想郷でもキレキレだった。

「え? レミリア様知ってるんですか?」

「ああ、俺は紅魔館でお嬢の専属執事として働いている」「副業でな」「そうなですかー。うちのお得意様ですよ。最近忙しいみたいでいらっしやってないですけど前まではすごい無邪気にゲームして

ました」

「レミリアが無邪気だなんて……」「想像できないわね」

ころろとアルがそんな姿を想像している中によるだけは

「どんな世界のレミリア様でも俺は受け止めます！」

ひとり告白とも取れる練習をしていた。

「なんか面白い方たちですね……」

「うん、私ところろろは普通だから安心して。クエスちゃんもああい

う人は気を付けた方がいいよ」

「いや、でももういろいろ遅いというか……」

「あ、ころろさんこれ倉庫に持って行って行ってくれますか？」

「ん？ ああ了解ですみすちー殿！」

中には調味料やら料理で使うものがたくさん入っていた。

勝手口から外へ出て裏の倉庫のドアを開けて中に入る。

「よつと、ここでもいいのかな……」

そこどころろろはある異変に気付いた。倉庫の中が何やら青白く光っていた。なにかと思いついて覗いてみると目の前に顔が現れた。

「うわああああ!!」

勢いよく尻餅をついてしまった。

「ころろ!？」

「大丈夫ですかころろさん！」

アル達は何だ何だと集まってきた。

「ひ、人が……」

ころろの指差す方にはゆらーつと影が動いていた。

「ああ、言い忘れてましたっけ。この人がうちのもう一人の従業員、れらいです」

「へ……?」

とNikolaとれらいさん達L・M・C(れらい、ミステイア、クエステイア)な夜雀庵従業員との出会いであった。

「えつとそのじゃあれらいさんは気合で幻想入りしたんですか？」

「うん、みすちーへの長年の愛が実ったらしく入れてしまったという

訳サ」

いや訳サなんてどころの話じゃない。この人は博麗大結界と幻と実体の結界という幻想郷を支える二つの結界を素手で破ってきたということである。

「いやなんか私の話があつちでも少し出ているらしくってそれでいろいろあつて今はうちの従業員兼倉庫番になつてる訳なの」

「倉庫番じゃないよ！ 僕はみすちーを守つてるのさ！」

「私はあなたから身を守りたいです」

飛びついてくるれらい氏をみすちーは踵蹴りで吹っ飛ばす。

「くうく今日もいい具合だよ！ みすちー」

「い、今の奴くらつても無傷だなんて……」

いくら夜雀といつても妖怪は妖怪である。そんな者の本気の蹴りをまともに喰らえば普通の人なら最悪死ぬ。

「どういうわけかこの変態はなにをどうしても死なないんですよ。

いくなれば瞬時にリスポンする程度の能力ともいべきでしょうか」

「みすちーへの愛がある限り僕は死なないのだよ！」

そこへラツキーが駆け寄り、

「れらいさん、あなた相当の強者と見た……。師匠と呼ばせてください！」

「うむ！ 二人で幼女が総べる世界を作ろうではないか！」

そして二人はがっちり肩を組んで「幼女オブアース！」と叫びながら倉庫へと消えて行った。

「ラツキーさんもロリコンの方だったんですね」

「ああ、クエスちゃんも気をつけなはれ」

「じゃあ、ころろさん達これ手伝つてもらえますか？」

みすちーが次に頼んだのは夜雀庵の一番人気のウナギであった。

「ほら明日からハロウィン祭でしょ？ これをたくさん焼いて博麗神社で売るのはよ」

「あーハロウィンか。 あ、じゃあ私は衣装でも作ろうかな！」

「え？ アルさんは洋服作れるんですか!？」

「うん、じゃあクエスちゃんも採寸するから来て！」

アルはクエスの手を取り居住区である店の奥に消えて行った。

「ふふ、楽しそうで何より」

「すごいいい子ですね彼女」

「うん、あれでも名前以外の記憶は忘れちゃってるのよ。容姿から

して外国の人ってことしかわからないけど」

「!? 幻想入りしたショックとかですかね？」

「さあね、あまり人のことを多く語る趣味ではないのよごめんなさい」

みすちーのもっともな答えを聞きころろは「すみません」と一言言った。

「でもあなたたちも大変そうね。幻想郷にまで来て」

みすちーは苦笑いしながら言った。

「いやそうでもないよ。俺らの世界はまともじゃない」

「? それはどういう・・・」

するところろは口到人差し指を当て、

「さて、人の事は多く語らぬ主義なので」

「・・・ふふ、そうでしたね」

そして2人はまた黙々とうなぎの下味をつける。

「本当に幻想郷は何でも起こるね。俺達も楽しくて助かるぜ」

「あなたもれらいに似てますね。現実で何があつたかは知りませんが普通、こんな治安なんて無いに等しい世界に来てら皆悲観するものです」

でも、とみすちーはさらに続けた、

「れらいは悲観するどころかこの世界に来れたことを泣いて喜んだんですよ? 本当におかしな人だと思いましたよ。けど彼が来てとても楽しくなりましたよ。しばらくしてクエスちゃんも来て、色々ありますけど私にはこの生活が楽しいんです。」

その口元は笑っていた。

「だからあなた達にも幸せが訪れますように。早く帰れるといいです
ねあちらの幻想郷に」

「ええ、でももう充分幸せですよこんな面白い人達と出逢えたんです

から」

ころろの言葉にみすちーはクスツと笑い、

「本当に変な人。私の周りにはそういう人ばかり集まってくる。こんなに嬉しいことはないですよ」

「本当だね」

そして2人は残りのうなぎの下味を終わらせた。

「さあ、明日は忙しいですよー!？」

「売ってる最中にあつちに戻らない事を祈りますよ」

「ふふ、戻ったら向こうの私によりしくって伝えてくださいね」
そして夜雀庵から光がスツと消えた。

そして翌日、ハロウィン祭り当日。

「さあ出来たよクエスちゃん！ 着てみて！」

アルは1晩で採寸から制作、微調整まで終わらせていた。

「おお！ ありがとうございます！ 早速着てきますね！」

10分後、奥の部屋から美しい衣装を着たクエスが出てきた。

「ふふん、どう？ 私の力作よ？」

「おーお前やっぱりこういうの得意だな」

ころろがクエスの着るワンピースをまじまじと見つめる。

それは胸元の空いた魔女の衣装。そしてここでアルは気づく。

「はっ！ 胸元開けない方がよかった!？」「どういう意味ですか……!？」

アルとクエスちゃんの「胸」の差は歴然だった。と言ってもアルは普通サイズだが。

「安心しろクエスちゃん、オレは小さい方が好きだぜ！」

「ラッキーさん本当に訴えましょうか？」

今度はガチだぞ、という気を発していた。女は怖いなど改めて思ったころろであった。

「でもクエスちゃん本当にかわいいですよ。 ねえれらい？」

「うん可愛いと思うよ」

「見てないし」

れらい氏はテレビに向かっていた。時折変な声を出すのは気のせいだろう。

「あ、ゴメンみすちーの間に合わなかった！ ゴメン！」

「いえいえ、いいですよクスちゃんはその看板娘ですし、看板娘がかわいい方がいいでしょう」

「そうそう、みすちーは見た目がハロウィンだから大丈夫だよ」

「れらいあなたを見た目もハロウィン風にしてあげましょうか？」

みすちーは薄く笑いながら言った。が、

「いいね！ それで僕も出ようかな！」

「ポジティブ！」

さあ早くみすちーの愛の鉄槌を！と叫ぶれらい氏を放置してみすちーは、

「さあ博麗神社へ向かいましょうか」

「あ、放置プレイね！ むしろいいかも！」

そんなれらい氏を置いて一行は外へと出た。

博麗神社はいつもと違う雰囲気醸し出していた。幻想郷中の人々が、妖怪たちが集まっていた。魔理沙の店や香霖堂、文の文々。新聞など幻想郷のあらゆる店が出店を出していた。夏祭りで使うような提灯はすべてかぼちや仕様になり灯籠も不気味な雰囲気を出していた。

「うわー……これじゃあなおさら参拝客来ないだろ」

ラツキーは境内に入るなりそういつた。

「ふうん、なおさら来ないね。人が来ない神社で悪かったね！」

「うわ!? 霊夢!？」

「あら、なんだ私のこと知ってるの？」

ラツキーは後ろからすつとのぼされた手に肩をガシつとつかまれ、振り向くとそこにはちよつとした仮装をした霊夢がいた。

「私はあなたのこと知らないけど、新入りかな？」

「あー……えーつとだな」

「……ろろ達はこちら側の霊夢にこれまでの経緯を全て話した。」

「ふーん、つまりあなた達は紫の次元の揺らぎに巻き込まれてここに
来ちゃったんだ。じゃあすぐ戻れるかもねここに居れば」

じゃあ、と行って霊夢は行ってしまった。

「さあ私たちも店の準備をしましょう」

そこから出店の店舗を作り看板を立ててここに出張版夜雀庵が完
成した。そして間もなく霊夢の開催宣言と共にハロウィン祭が始
された。

「いらつしゃーい！ ウナギはいかかなー！」

ころろ達はサチの家での手伝いを教訓に精一杯声を出し売り上げ
に貢献する。れらい氏もビラ配りに大奮戦している。

夜雀庵にはかなりの行列ができていた。

「いやーすごいねこりゃ」

「ええ私もここまで人が来るのは初めてですよ」

クエスはふふつとほほ笑んだ。ころろはその笑顔を見て今が最高
なんだなと思った。その時だった。

ドオンつと大きな爆発音が境内の奥の方で音がした。ころろ達が
見に行ってみるとそこにはかなり巨大化し極太の触手と6個の複眼
をもつA級の魍魎がいた。

「グオオオオオツツツツツツツツ」

大きな雄たけびをあげ、周りの人を襲い始めた。

「おいおい、マジかよ……おい、ラッキー！ 霊夢探してこい

！ 魔理沙でもいい！ によるはこいつ抑えてくれ！ アルは避難
誘導！」

「オーケー！」

「ああ」

「わかったよ！」

ころろの指示に的確に動くNikola、そして

「ころろ俺は？」

「ああ、トライ居たのか。書いてる俺も完全に忘れてたぜ」

「は？」

「まあいい、お前はラッキーと一緒に霊夢か魔理沙呼んで来い！」

コケーつとおそらく了解の意味なのだろう。トライはラッキーの肩にのり、

「よし行くぞラッキー一等兵よ！」

「うるさいなあ、雑魚扱いすんな！」

人込みをかき分けるようにラッキーは進んでいった。そして魍魎の前に立ったによる、その目には狂気が揺らいでいた。

「さてと、うちらのお祭りを台無しにしてくれた手前にはきっちり手前のタマで落とし前つけてもらおうか」

そしてメガネを捨て叫ぶ

「狂符「狂宴乱舞」」

その目には緋色が宿り吸血鬼レミア・スカーレットから授かったヴァンパイアの力の一部を引き出すスペルカード。これによりによるの身体能力は飛躍的に上がる。しかし吸血鬼の特性を継いでしまいう都合上、昼間では効果が薄い。

「今が夜でよかったぜ……おかげでお前を捌けるツ！」

そして一気に前へ跳躍した。

観客の避難誘導が終わったアルはすぐさまによるの援護を開始する。

「彩符「」」

それは全ての「戦況」を見通す「眼」を得る。相手の行動の先を予測し的確に指示を出す力。

「による上からくる！」

「わかってるっちゆうのー！」

後ろへとステップを踏み触手から逃れる。が、すぐさま上への回避を強いられる。触手は全部含めて10本。一本一本が太い。

「くそーきりがないー！」

一方、ころろは夜雀庵へと向かっていた。

「あ、みすちー！今すぐ逃げな！」

「え!? ちょっとどうしたんですか!？」

ころろは魍魎が出現したこと、よろたちが戦っていることを説明し早く逃げるよう呼びかけた。みすちーたちは納得しとにかく逃げる支度を始めた。

「ころろ達は大丈夫なんですか!？」

「ああ、こないだもあんなのよりやばいのと戦った」

「そうですか……気を付けてくださいね」

みすちーはクエス達を連れて逃げようとしたが一人だけ逃げない男がいた。

れらい氏だった。

「れらい!? 何やってるんですか早く逃げますよ!」

「みすちー達は早く行って。僕もちよつと行ってくる」

その目には決意が宿っていた。それにみすちーは気が付いた。

「……必ず帰ってきて下さいよ」

「当たり前でしょ。みすちー達を残していけるわけないでしょ。それに僕は不死身だし」

頬をポリポリとかいて笑った。

「そうでしたね……」

「さあ行こうか。ころろ君」

「ええ、俺らも帰らないと」

そして二人は戦場へと行く。

一方、霊夢探しのラツキー& amp; トライはようやく霊夢を見つけた。が、

「マジかよ……この馬鹿巫女」

当の霊夢は酔いつぶれて夢の中だった。魔理沙も同じような状況だった。

「しょうがない。俺達が行くしかないな」

「ああ、行くぞ等兵よ!」

「等兵言うな」

そして二人はよろ達の元へと急いだ。

によるが戦闘に入り10分が経っていた。回避に回避を重ねた戦闘によるの体力は底をつきかけていた。得意の吸血も魍魎には血が流れて居ないようだった。

「ちっ早く来いよ……もう持ちそうにないぜ？」

「でもしやべる元気はあるみてえだな」

その時によるに降り注いでいた触手の雨がやんだ。光る鉋で断ち切られた触手は霧散した。

「遅いぞラッキー……」

「悪い、あの馬鹿霊夢の野郎酔いつぶれていやがった」

「全く……あいつは」

そして目の前にやってきた触手を切り落とし

「じゃあ俺らが頑張りますか」

「ああ」

ふたりが意気込んだその時だった。

「転符「人神変化」」

眩い光の中から軍服の少年が出てきて大量の砲門を召喚し、魍魎に砲弾の雨を浴びせた。

「やあ、君達。大佐の力をみせてあげよう。回避は自己責任でシ

クヨロです♪」

「ふざけんなああああ！」

そう、スペルカードで変身したトライであった。人間に戻れることに加え条件を満たせば様々な物に変身できるというもの。しかも戻るの普通の人間ではなく身体能力が飛躍的に上がるというもの。

トライは杖をふり物質の法則さえ無視して30cm砲を召喚した。

「マジかよ……」
「オレは霧散して逃げるんではシクヨロです」

そういうとによるは大量のコウモリに変身してどこかへ飛んでいった。

「ちよつと待て待て待て……」

「発射♪」

ああああああああああああああああああああああああああああ

あとというラッキーの叫びを無視してトライは発射した。それは魍魎に着弾し木端微塵に粉碎した。

「ふう、少しやりすぎたかな？」

「当たり前だー！」

そんな時アルの叫び声が聞こえる。

「二人とも後ろ!!」

粉碎したはずの魍魎は瞬時に触手を再生しトライ達に攻撃してきた。

(間に合わないっ………)

ドドドドドツと触手は豪雨のようにラッキー達に降り注いだ。がそれを防いだものがいた。

「れ、れらいさん!?!」

「やあ、元気？ まさかこの能力がこんなところで役に立つなんて思わなかったよ」

その姿はボロボロで普通なら立ってられない状態だった。

「大丈夫なんですか？」

「うん全然平気よ」

そしてれらい氏を襲っていた触手が全て吹き飛んだ。

「よお、元気か？」

「遅せえよクソリーダー」

ころろは手を差し出しラッキーはその手をつかみ起き上がる。

どこかへ逃げていたによると後方から前線へきたアルも合流した。

「さてと行きますか」

「うん、みすちー達も待ってますから」

全員が一步踏み込みころろが叫ぶ

「行くぞ Nikola 商店、出撃だ！」

「れらいさんは囷を、によるとトライは迎撃、アルはオペレーターを、ラッキーは待機！」

「は!?!なんで俺だけ」

「俺はお前に最後のトリをお願いしたいんだけど？」

ころろの意図を察したのかラッキーはニヤツと笑い、「OK」

と返事をした。そしてころろは動く。れらい氏にすべての攻撃が集中していたからだ。どうやらあの人はヘイトを引きやすいらしい。「よし、よろ、トライあいつを木端微塵にしろー!」

ころろの意外な指示に二人は困惑した。

「!? でもそれじゃ……………」「お前何考えて……………」

そんな二人にお構いなくころろは

「早くしろっ!」

「ちっ……………流石腹黒リーダー……………もうどうなっても知らねえぞ!」

「まあいい、指示に従おう!」

二人は文句を言いつつ最大火力で魍魎を吹っ飛ばす。

「これでいいのか!?!」

「ああ、上等さ!」

そしてころろは唱える。

「刻符タイムアベレイト「時間操作」!!」

ころろの叫びと同時に一瞬時間が止まり、すぐに戻る。

「ちよつと細胞の構成を変えさせてもらった。これで霧散したものは元に戻らない」

魍魎の再生条件は霧散した細胞同士を再構成すること。その霧散した細胞の構成を弄り本体と違う細胞にした事で元に戻らなくなった。

「今だ! ラッキー!」

「待つてましたあああああ!」

出番を待ちわびていたラッキーはいつも以上に大きな声で叫ぶ。それこそ幻想郷中に響くように。

「運符ラッキー・ボックス「幸運の箱」!!」

手にしていた鉈が消えて光り輝く箱がどこからともなく降りてきた。箱を開けるとそこにはハズレの文字。

「ハズレだ……………でも今日はこっちが本命だっ!!」

箱からカードを取りデヴァイスに差し込む。

「行くぜっ!!ミスフォーチュン・リチエインド祓符「不運連鎖」!!!」

それは魔理沙のマスタースパークと似て非なる業。人々の不運を集めて強大な力にするラツキーの奥の手。

「今日のは飛びつきりでかいぜ? 今日はお前が大切なハロウインを台無しにしたからな。ここに來てた全員の不運を集めてお前にクーリングオフしてやるッ!」

その不運の業火になすすべもなく魍魎は焼かれ消滅した。こうして幻想郷の壮大なイタズラは幕を閉じた。

「ふう………終わったああああ」

れらいは博麗神社の本殿の階段に腰を下ろした。

「君達が居なかったら大変だったよ」

「それはこちらもですよ。れらいさんがいなかったら勝てませんでした」

「そう? あ、これ食べる?」

れらいが袋から取り出したのは夜雀庵のうなぎ。

「あ、貰います」

そうころろが手を差し出した時だった。

れらいの目の前の空間が歪みころろ達が消えた。

「あ、もうお迎えか……でもちゃんとうなぎは持っていったのね」

れらいの手には差し出したうなぎが消えていた。

そして星が煌めく空へ向かって眩いた。

「また会えるといいね」

そつと立ち上がり博麗神社へと向かう。二人の少女が待つ家へと。

ころろが目を開けるとそこは博麗神社の裏だった。

「俺達飛ばされたのか……?」

表へ回ってみるとハロウイン祭りの真つ最中だった。何がなんだかわからないでいると霊夢が声をかけてきた。

「よおころろ帰ってこれたんだな」

その言葉が指すとおりこの霊夢はころろ達のことを知っていた。

「?・・・俺ら帰ってきたのか」

あたりを見回すと皆ハロウィン祭りを楽しんでいた。

「さてところろ君、Trick or Treat、お菓子をくれないとイタズラするぞ?」

霊夢は手をほいっと差し出した。

「ふっ、もうイタズラは勘弁な」

そういつてころろは仲間達の元へと戻り戦闘で疲れていたが祭りを楽しんだ。

そして午前5時を回り、妖怪達は帰っていった。みすちーは屋台の片付けをしていた。そこへ

「Trick or Treat! お菓子をくれないとイタズラするぞ?」

見上げるところろ達がたっていた。

「もう来るのが遅いのさ。もう無いよ?」

「んじやイタズラだな。ほい」

みすちーはころろからある物を受け取った。

「うなぎ・・・? どういう意味」

それを聞こうとしたがころろたちはもう階段を降りようとしていた。

「あっちのお前がよろしくだってきー」

そう確かに言った。その後ろ姿を朝日が照らしていた。まるでどこかで戦ってきたのかというほどボロボロだったがみすちーにはそれがとても誇らしく思えた。そして不意に言葉が出る。

「ありがとう」と。

手に持ったうなぎを一口パクつと食べてみる。

「・・・よくわからないけどあっちの私もうなぎ焼くのうまいみたいね・・・美味しい」

そして幻想郷は朝を迎えた。

ころろたちが帰ってしまったあちらの幻想郷。

「そうですか、あの人達は帰っちゃったんだんですね……」

「うん、僕の目の前でね」

項垂れるクエスにれらいは差し出す。それはアルがクエスの為に作った魔女の衣装。

「彼らは帰ってしまったけど彼らがいたという証拠はここにあるんだ。夢ではなかった。だからまた会えるよいつか」

クエスはそれを受け取り頷く。

「そうですね。また会えるかも知れません。どこかで」

「うんうん、やっぱりクエスちゃんは笑顔じゃないと」

「さあ二人共開店準備しますよー！」

店主のみすちーの声に二人は大きく返事をする。

こうしてころろたちが幻想入りしなかった幻想郷では今日も夜雀庵sが元気に開店する。

「ふえ……」

朝日が目に差し込み霊夢は目を覚ました。酒を飲み過ぎて酔いっぶれていたのだろう。まだフラフラする。隣では魔理沙が気持ち良さそうに寝息を立てていた。

なんとか起き上がり表へ回つてみると、

「な、何よこれ……」

何があったかは知らないが境内は荒れていた。そこらじゅうにクレーターが出来ていたのだ。

「誰がこんなことやったのよー！」「おい、霊夢うるさい声出すなよ。まだ私は寝たいんだから」

誰もが思っていただろう。あの時霊夢が起きていればあんな弾丸が発射されず30cm砲なんてもの召喚されずに済んだということに。つまり紛れもなくこれは霊夢自身が引き起こしたことなのだがそれをするのはまた先の話だ。

どの幻想郷にも今日も朝日が昇る。

F
i
n

スペルカード

ころろ達がこの世に生を受けたのは今から17年前、2038年のこと。そして現在2055年の夏、ころろ達はこちらに飛ばされた。地球温暖化が進み2010年代には考えられないような異常気象が頻発している。その一方で人口は増加の一步をたどり毎年億単位で人が減っているのにまた億単位の人が生まれてくるのが現状である。そして地球の行く先が不安がられる中、また違う「不安」が世界に姿を現した。人が増えれば思想も増える。そのハネ返り達が現れたのである。そう「デザイアンシヨールズ」である

「デザイアンズシヨールズ」は世界的に有名なテロ組織である。結成は2035年と言われている。その後色々あつてさらに強大な組織になるのだがそれはまた別の話だ。2055年、ついに懸念されていた戦争に発展した。ころろ達の日本も例外ではなかった。そして3か月前ころろ達は全員親をテロで亡くした。トウキョウに出かけていたころろ、ラッキー、による、アル、トライの親はデザイアンズが放ったミサイルの破片とそれによる二次災害によって亡くなった。

ころろ達はヨコスカにて学校があつたため難を逃れたが突然「親」という存在が居なくなつたことにより働かなくなつてはいけなくなつた。バイトを転々として疲弊していたころろ達にアルは田舎へと避暑しに行こうと言つたのである。

「正直こつちに来てよかつたとも思つてる。そりや最初は訳のわからん世界に放り出されて元の世界に戻りたいと思つたけど今になつて考えてみればここに居れば戦争なんか気にしなくて済む」

ころろは空を見上げて言った。そして「だから」と続け、
「俺たちは助け合つて生きていかなければならないって思つたんだ」
「そんなことがあつたんだ。もしかしたらその戦争から逃げたいって思いが具現化したのかも」

「具現化？ 思いが形になるってこと？」

「そうだよ、とサチは肯定し」

「この世界はあつちの非常識が常識なわけだよ。それがスペルカード

ドにつながるのさー!」

「スペルカード? なんだそれ?」

ラツキーの頭にはハテナが浮かぶ。

「うーん博麗の巫女さんとかの方が詳しいんじゃない?」

「そっか、分かった。行ってみるよ。ごちそう様!」

「え? もういいの? まだ報酬払ってないよ!」

ころろは団子が入った袋を掲げて、

「これとそのスペルカードってやつで十分だ! また依頼してくれ
!」

こうしてN i k o l a商店の初仕事は幕を閉じた。

「あ、いたいた! ころろさん」

博麗神社へと向かうころろ一行に後ろから、否、上から呼びかける
ものがいた。文である。

「あのーお仕事紹介した報酬もらってないんですがあ」

文は手を「金」の形にしていた。

「はい、報酬」「わーいお団子だあ………ってなんですかこれえ
!」

なんとも見事なノリツツコミの後に文は叫んだ。

「ちよつとお金じゃないじゃないですか!」

「オレは報酬って言っただけで金とは一言も言っていない」

まんまとのせられた文は不満そうに団子を頬張った。

「で、みなさん博麗神社に何しにくんですか?」

「ん? ああちよつとスペルカードのことを聞きにだな」

「スペルカード!? 貴方たち外来人がですか!」

驚く文にころろは

「いいか、こういうのは気合だ」

「そんな精神論じゃできませんってー」

一行に文を加えてころろ達は博麗神社へと向かった。

「スペルカード!? 貴方たちが!」

霊夢は先ほどの文より驚いて言った。

「そんなに意外なのか？」

「いやそういうわけじゃないけど普通の人間はそういう面倒事には介入しないから」

霊夢は呆れながら言った。そう、人間の里の人達は争いごとを嫌っている。もともとスペルカードとは妖怪と人間、強い妖怪が力をセーブするためなど対等な決闘のルールとして導入された。

かつて妖怪の力が脆弱化していたころ突如現れた強大な力を持った吸血鬼が次々と妖怪たちを征服していき、困った妖怪たちが霊夢に相談したことからスペルカードルールが提案された。

基本的には技の名前とそれを体現した物をいくつか考えておき、それを契約書形式で契約書に記したものを複数所持する。

「そもそもスペルカードがあってもそれを貴方たちが体現できないと意味ないでしょう？」

「え、スペルカードってなんかこう必殺技ドーン！的なあれじゃないの？」

はあ・・・とあきれた霊夢は

「まずはスペルカードの歴史からでも学んで来い！」

とそれから数時間霊夢によるスペルカードは何たるかの講義が行われた。これがまた地獄であった。とにかく同じことを何回もやって頭の中に叩き込むという洗脳とも取れる授業であった。

そしてそんな地獄を生き抜いたNikoiaの5人。

「はい、あとは各々体現したい技を適当に考えて契約書にでも書いておきな」

霊夢はカード型の契約書を置いてそそくさと家の中へ戻ってしまった。

「し、死ぬかと思った・・・」

「でもこれでは技を考えるだけね」「コケー」

「よし、じゃあ各々考えよう。ただし夕飯までには戻る事！」

「りようかい！」

5人はそれぞれ求めるものを探しに幻想郷中へと散らばった。

「オレどうするかなー」

ラツキーは草原に腰を降り考えていた。幻想郷の人達は「〇〇程度の能力」があるらしい。ならば自分には何があるのか、それを考えていた。あちらにいる時、ラツキーはただ見ていることしかできなかった。親が死んだのも学園で聞いたしテロなんかに対抗できたわけでもない。

「なんにもないなあーオレ……………」

草原に寝っ転がり考えた。その眼前には果てしない空が広がっていた。

「なにしてるのさあ」

いきなり目の前に少女の顔が現れた。

「ちよつ、チルノ!? 近い!」

ぱつとラツキーは飛び起き数歩下がる。チルノに関わるとロクな目にあつてきてない。

「なんか悩んでるんだつたらこの天才チルノ様が相談相手になるよお?」

ふふふ、と切り株に仁王立ちしてラツキーを見上げてきた。

「……………そつかまあお前でも相談相手ぐらいにはなるよな」

そういうチルノの横に腰を降りこれまでの経緯を説明した。

「ふーんそんなこと考えてたんだ。馬鹿にしてはやるわね」

「誰が馬鹿だ」

するとチルノは少し考えて、

「アンタには人を笑顔にする能力がある。そうは思わない?」

「人を笑顔に……………?」

考えてみればそうだ。誰かが暗い顔しているときに自分が何か言うとその人は笑顔になっていた。

「そつか……………オレにもできることはあつたな」

「さつそくカード型契約書に「符牒」を書き込んだ。」

「あとは技か……………」

それからしばらくチルノと二人で技を練りまくった。様々なもの

を考えて完成した。それが、

「運符ラッキーボックス「幸運の箱」……」

人々を笑顔にするためのものがなんでも出てくる。そんな自分らしいスペルカード。そして「光符「光斬鉞」」、「天符「無限天笑拳」」を編み出した。非日常が日常ならこれもありだろう。そう思うことによつてただの人間が物体の召喚を可能とする。

「これで完成だ」

「よかったよかった。じゃああとは実践だな！」

そういうなりチルノは魔方陣を大量展開した。

「へっやる気か？ 俺は強いぞ？」

「ふん、すぐにそんな口叩けなくなるわよ」

そして轟音と共に多数の光球が発射された。ラッキーは「光斬鉞」を召喚、それをよけつつチルノに接近する。が妖精といえどさすがに強くすぐに押し返される。

「まあいうだけは有るな」

ポケットからカードを取り出し叫ぶ。

「天符「無限天笑拳」!!!」

ラッキーの「声」と共に魔方陣が展開され光弾が大量射出され集まり一つの拳となりチルノめがけ飛んでいく。

「なんの！ 甘いのさ！」

チルノが繰り出したのは光球の集束撃ち。互いの光がぶつかり合いそして散った。

「ふ、まだまだアタイに勝つには百年早……!?!」

まだ勝負は終わっていない。ラッキーすでに次の手を召喚していた。そう、「幸運の箱」である。

「残念だったけど今日は外れだったんでね。とびっきりの奴をお見舞いするよ」

ラッキーの手には魔理沙のミニ八卦炉に似たものが握られていた。

「外れた時には大抵参加賞がついてくるもんだぜ？」

そして発射する。

「祓符「不運連鎖」!!!!」

デヴァイスから一本の禍々しい気を帯びたビームが発射されチルノに直撃する。

「ま、あんま舐めないことだな」

チルノの弱点は少し油断し過ぎなところかもしれない。

「へえー……ならアンタはまだ甘ちゃんね！」

「!? なに!?」

砂煙がはれるとそこにはチルノはいなかった。見上げるは上空、そこにすでにスペルカードを手に持つチルノが居た。

「雷符「ヘイルストーム」!!!」

その名の通り嵐のごとくの勢いで雷がラッキーを直撃する。上空からの攻撃は逃げ場がない。ラッキーは光斬鉞を最速詠唱で召喚、召喚のおまけともいえる光刃でそれを迎撃する。がやはり勢いに押されその大半が落とされずなおも接近する。轟音と共に頭上から降りかかる雷を走りつつ斬撃でかろうじて迎撃する。そして立て続けに空気を「斬る」斬撃、カマイタチでチルノへ攻撃する。だがあっけなく防がれる。

「へ……これならまだ戦えるッ」

「いうじゃない。 なら日が暮れるまで相手してあげるよ！」

そして平原は氷と光に包まれた。

「どうしよう……」

紅魔館の湖畔でアルは一人で悩んでいた。無論スペルカードのことである。必ずしも習得しなければならぬわけではないがやはりみんなのためにも習得したい。でも運動神経は良くないし、と悩み続けもうじき一時間が経つ。

「私にはころろみたいな統率力もないしラッキーみたいに人を笑顔にすることもできない、にように器用にできる訳でもなくトライのようにポジティブ万歳でもない。 どうしたらいいの?」

「ならばあなたはそれを見続ければよいのでは?」

アルの問いに答えたのは空ではなく人間であった。

「あ、咲夜さん。 どうしたんですか?」

「それは私のセリフですよ。　買い物の帰りにふと湖畔を見に来たらあなたが居たものですから」

十六夜咲夜、「時間を操る」程度の能力を持つ紅魔館のメイド長。人間ながら吸血鬼のレミリア・スカーレットに仕えている。

「アルさんが悩み事などあまりしないでしよう？　だから気になったのです」

「そうですか……実はですね……」

自分たちがスペルカードを作ろうとしていること、だが自分にできることがないということを咲夜に話した。

「ふむ、そうですね。　先ほども申しましたがあなたはあの人たちを見続けられいいんですよ。　ただ見るのではなくその人たちをサポートするようにね。　自分にできないことが無いなんて思わないことですよ。　なにかしらあるはずです自分にできることが」

ふふつとほほ笑みながら咲夜は言った。

「そうですね。　探してみます自分にできることを」

アルは拳を強く握っていった。

「では私はこれで。　頑張ってくださいね」

「はい、ありがとうございます」

アルは自分に道を示してくれた少女に別れを告げ帰るべき場所への帰路についた。

「コケー……」

トライは悩んでいた。　無論スペルカードのことだが実際は8割方今日の夕食のことを考えていた。　そんな誘惑を振り切りトライは猛烈に考え始めた。　まず第一に人間に戻る事。　だが戻ってとしても普通の人間では足手まといになるだけだ。　ならば、と思いトライは契約書に書き込んだ。

「できたぜ……これで俺は最強イケメン男子に元通りだ！」

「転術一（符）「人神変化」、短時間という制限付きながら人間に戻れ、且つどんな兵器でも無条件に召喚できるといふもの。」

「これで俺は最強だ……」

そしてトライは他の仲間たちを帰るべき家で待つことにした。が、そんな家に帰ろうとしなさそうなものがいた。によるのである。

「で、つまり貴方は私の力を使いたいわけね？」

先ほどによるが淹れた紅茶をすすりながらレミリアは自身の目の前に跪く男に、翡翠によるに問いかけた。

「はい、レミリア様。俺なりに考えた答えです。みんなのために吸血鬼が持つ力の一部を使う、それが俺にできること」

その目は決して冗談で言ってるそぶりはなく決意があつた。レミリアはそれも踏まえてによるに言った。

「ならばいいでしょう。スペルカード使用時のみ私の力を引き出せるようにバフがかかるようにしなさい。ですが吸血鬼の力を貴方は耐えられるでしょうか？」

いくら見た目が幼女の少女のレミリアだが実際は何百年も生きている吸血鬼でその人体構造は人間とは似て非なるものである。それに普通の人間が耐えられるか、ということであるが

「耐えます。いや耐えてやります」

「ふふっそれでこそよ。私の騎士」

そしてこの瞬間によるは一時的に吸血鬼になれる能力を手に入れた。

「どうするかな．．．．．」

ころろは悩んでいた。無論スペルカードのことである。さつきから紅魔館の方や草原の方で爆音が聞こえている。おそらくラツキーかによるがスペルカードを試しているのだろう。

「オレは何ができるだろうか」

射的やクイズ、PCなどの電子機器は強い。がここではあまり役に立たない。趣味で動画の編集や絵を描いたりしてはいるが役に立ちそうでもない。

「．．．．．時間．．．．．」

思い出した。昔一度だけ周りの時間を止められたことがあつた。正確には停まったわけではなくかなりゆったりした感覚で時が動く

ようになったというのだが。事故に遭いそうになったとき、普通なら両腕骨折、最悪「死」なような事故だったがころろはかすり傷だけで済んだ。おそらくころろの本能がそうさせたのかもしれない。

「オレには時間を操れるのか？」

そんな中二臭いこと思ったことなかった。だがありえなくはない。ポケットから契約書を取り出しとりあえず書き留めておく。それをポケットに戻し家路につこうとした時だった。上の方で悲鳴がした。聞いたことのある声だった。ころろがいるのは丘の上。上の方というのは山の頂上らへんのことだ。何か嫌な予感がしころろは山頂へと急いだ。

ころろが息を切らせ山頂に着くとそこにはサチが複数の妖怪に囲まれていた。

「！　ころろ来ちゃダメ！」

「おう？　なんだ兄ちゃん」

ガラの悪そうな妖怪たちだ。

「その娘から離れろ……」

「ふん、てめえには関係ねえだろ！」

妖怪の1人が殴り掛かってきた。それを右手で軽くないです。武術の心得は多少ある。学校の授業で習い護身術程度の感覚でならつていたがまさかこんなところで役に立つとは。

いなされた男は勢い余って転倒する。「いってえ……」と男の苦言と共に鈍い音がした。

「おい、兄ちゃん、やってくれたのお……ただで済むと思ってんのかあ!？」

「はっただで済まないのはお前らの方だぜ……」

「このクソガキがあああああつ」

残り5人。一斉に襲いかかってくる。

(流石にキツイか……?)

1人ずつなら相手出来るがさすがに妖怪相手となると無理がある。だからこの場でころろが選ぶ最善の道は

「……逃げるッ」

正面から扇状に広がりつつ接近してくる妖怪達の真ん中、リーダーと思われる妖怪を踏み台にしてサチのところへ着地する。

「っ俺を踏み台にっ!」

「サチ大丈夫か!」

「うん……」

とりあえずサチのところへと来れたものの状況は悪くなっていた。2人の後ろは崖であり正面には男5人。完全に囲まれていた。

「さて兄ちゃんこっからどうするんだい?」

その口はニヤニヤとしていた。

「残念だが2人ともここで死んでもらうぜ? 俺達に楯突いた罰だ」

手には短剣。深く握り締めている。

絶対絶命。

リーダーがその手を振り上げ斬りかかる。それはころろを一刀両断するコース。

「死ねやあああああっ!!」

「まだ死ねないんだあああああっ!」

叫びは想いとなり秘められし力を引き出す。ポケットが光り輝いた。刹那、時間が止まりまた動き出す。刀はころろの左肩を掠った。

「ぐっ……」

「ころろ!」

左肩からは鮮血が流れていた。リーダーは戸惑っていた。

「何故……!?! 直撃コースだったはずだ!」

そして戸惑いの矛先は遂にサチへと向かう。

「何故だあああああっ!!」

「それくらいにしとけよ……」

そう聞こえた瞬間短剣の刃先が宙を舞った。振り下ろされし光り輝く鉞は確かに短剣の刃を切り落としていた。

「ラッキー……か?」

「よう、チルノと戦うのも飽きたんでな。家に帰ったらお前だけ約束違えてたからな。ちと怪しいと思って散策してたらこれだ」

そして妖怪たちをその目で睨みつける。

「それ以上来てみな。次はお前らのクビを飛ばしてやる」
その鋭い目つきは妖怪を芯から震え上がらせ退散させた。

「さてと今日の夕飯は外食だ。行くぞ」

「え?.....」

「さてみんな揃ったようね」

よくお城で見かけるような長いテーブルに座らされたころろ達。現在居るのは紅魔館。そこで夕飯。ここへ来るなり咲夜が手当てしてくれた。サチもそのまま来ている。

「スゴイ.....私紅魔館入ったの初めてなんだ! いつもは怖そうなお姉さんが見張ってるから見学させてとも言えないし」

「あら私そんな怖かった?」

「げっ! あのお姉さん!」

ちょうど外から帰ってきた紅 美鈴が意外そうな顔をしていった。サチはとっさにいすの後ろに隠れる。やはりまだ年相応の娘らしい。

「あら美鈴、外はいいの?」

ころろの右正面のメガネをかけた少女、パチュリー・ノーレッジが言った。彼女はこの紅魔館の地下にある大図書館に住んでいて大量の魔導書を読み漁っているらしい。生まれながらの魔法使いで魔理沙と違いエリートであるが、喘息もちで体が弱いらしい。それでも千年は生きているらしいが。

「ええご主人様が今日はいって」

「ふうん、でレミイは何がしたいのかしら?」

パチュリーは自分の左隣、すなわちころろの正面に座るこの館の主人に尋ねた。

「そうねえ.....まあみんな揃ったし美味しい食事でも食べながら話しましょうか」

ふふふつと薄く笑いながらレミリアは言った。

(なんだ.....何かある.....)

ころろは少し警戒していた。敵としてではなく普通に友人として何か怪しいと思ったのである。レミリアがたかが夕食のためにNi

ko1a全員を呼び集めるなど考えられない。何か裏がある。そう思ったのである。ころろが脳内で思考をめぐらせていると数人のメイドが料理を運んできた。そして慣れた手つきで全員の前に食事を並びおえて素早く部屋から出て行った。

「では本題に入りましょう。Mr.ころろ、貴方先ほどスペルカードを発動させたわね？」

「!? いやオレは……」

おそらく先ほどのことだろう。確かにころろの叫びと同時に一瞬周りの時間が止まったと思ったが止めることを継続できなかつた。つまりアレは失敗した。ということなのだが、まだスペルカードに符牒も記してないところでの発動だったがまああの状況だ。ルール無用ではあつたが。

「失敗した、と思つているでしょう？ でもあれはどちらかと言えば「不完全に発動」したと言つた方がいいかしらね」

「「不完全に発動」した？」

「ええ、おそらく貴方のその「編集」する程度の能力は私の「運命」を操る程度の能力と咲夜の「時間」を操る程度の能力を掛け合わせて半分にしたところね。貴方がまだ自分の能力を把握していなかったから不完全に発動してしまつた。貴方のそのスペルカードは時を止めて運命に抗わない程度に運命を変えらなくてもいいでしょうか。つまり貴方が切られるのは確定だつたけど貴方が咄嗟に死ねないと思つたからその思いがスペルカードによつて具現化されて腕の切断から掠り傷に運命を変更したのでしょう」

只々ころろは驚いていた。つまりころろは運命を操れるということ。そんな能力があるだなんて思つていなかった。

「でも貴方のその力は単体では意味が無いのよ。仲間がいて初めて効果があるスペルカードなのよ」

「……なら俺も何か自衛できるものを作らないといけないな」

「そうね。でもそれまでは貴方達がころろを守ってあげるのよ？」

ころろの両サイドにいる少年少女たちに問いかけた。

「もちろん」

「私がサポートしてあげる！」

「まあ仕方ないな」

「まったくキミってやつは」

「うんうん！ 私もお団子でサポートしようかな！」

「みんな……」

ああ仲間がいる。自分を必要としてくれる人がいる。こんなに嬉しいことは無い。

「ありがとう、みんな」

「さて、話も終わったし食事会でもスタートさせましょ？」

「やったー！ 私こんな豪華なの初めてなんだ！ お母さんたちに自慢しちゃおー！」

こんなに大勢で食事をするのはいつ振りだろうか。みんなでワイワイ喋りながら夕食をたのしんだ。そして楽しい時はあつという間に過ぎる。飲み終わった紅茶をコトつと置き、ナプキンで口を拭いたレミリアは

「さてと、食事も終わったことですし食後の運動でもしましょうか」

「食後の運動？」

ええ、と頷き「みんな外へ行きましょうか」とみんなを連れて外に出た。

「なあレミリアく運動なんて何するんだ？」

「あらラッキーわからない？ 貴方たちせっかくスペルカードを習得したのだからそれを私たちに見せてみなさい」

そしてレミリアとその妹、フランそして咲夜にパチュリー、メイリンから強い殺気が発せられ始めた。

「へっこれじゃあどつかの童話と一緒にだな！」

「こらラッキー、集中しなさい！」

「全く……レミリア様とフラン嬢を目の前にその態度とは、こんな時じゃなければオレがぶん殴ってやるところだぜ？」

「さあ俺の力をみせようか」

全員が戦闘態勢に入り身構える。そして、

「腕の傷を完治させたのはこの為か……まったく何か裏があるとは思っていたがこういうこととはな」

つい先ほどまで動かなかった左腕をぐるぐると回したころろは「うーんまだ違和感あるけど……」

「どうやらただ飯ってわけではなさそうだな」

ニヤツと笑ってころろは言った。サチは館の窓から見ている。なにせこれからここで繰り広げられる「遊び」はただの少女にはキツすぎるものである。

「当たり前じゃない。私が貴方たちのような人にタダでディナーを奢るとでも……」

「今日はどうしても暇だったからね！ 魔理沙の代わりに遊んでもらおう！」

「レミリア様のためお供します」

「やれやれレミイったら大人げないわよ……まあ私も付き合うけど」

「さあどんな技を使ってくるのかな？」

「編集」する程度の能力を持つ少年、赤羽ころろ。

「笑顔」を振りまく程度の能力を持つ少年、黄沢ラッキー。

何かに「引き込む」程度の能力を持つ少年、翡翠による。

全てを「見通す」程度の能力を持つ少女、蒼樹アル。

万物に「変化」する程度の能力を持つ少年、トライ。

「さてとNikoia商店、出撃するぞッ！」

紅い館の前で吸血鬼と少年少女による究極の「遊び」が始まった。そして運命は廻りはじめる。

黄泉返りの異変

L／Re：GENERATION

死人、それは生命的に、肉体的に死んだ者たち。蘇ることのない故人たちのこと。

そう蘇らないはずである。が、ここは常識が非常識な幻想郷。何でも起きる。そう、それがたとえ死人を蘇らせることだとしても。

ころろ達が幻想郷に来て早、一か月。暮らしにも慣れ、食べていける職も見つかったところで生活も安定してきている。現在9月下旬。今、ころろは帽子を被っている。三角帽子の。

「ハッピーバースデー!! ころろお!!」

パーン、パーン、とクラッカーのはじける音が家中に鳴り響く。9月23日、いわゆる秋分の日。そしてころろの誕生日である。

「いやーありがとう、ありがとう」

テーブルにはアルが作った豪華な夕食。長い食卓用テーブルにずらりと並んでいる。そしてそれを囲むようにアル、ラッキー、による、トライ、魔理沙、霊夢が並び、真ん中には今夜の主役であるころろが座る。

「さあみんな食べようか!! よし、かんぱーい!!」

「大変だよ!!」

みんな手に持ったコップを掲げ乾杯をしようとしたとき荒く息を吐きながらサチが駆け込んできた。

「なんだよサチ、いまから飯だつてのに」

「大変だよ！ 死んだ人がよみがえってる!!」

「は?」

さすがにラツキーも信じていなかった。いくら常識≡非常識の幻想郷だからと言って自然の摂理に反する生物がよみがえることなどないからだ。

「それで私犯人見ちやつたのよ!!」

「おいおい、マチかそれ? まあガキの記憶力なんざアテしないがよ」

「まあラツキーそういうなって。 で、サチ、そいつどんな姿してたんだ?」

によるに促されサチはゆっくりと犯人の特徴をしゃべりはじめた。

「えっと確か、髪の色は黒で少しハネてたかな? 赤いパーカーで確か身長は170ちよつとだったかな?」

「おいおいそんなやつこの世に一人しかいねえじゃんか」

そしてみんなは一斉にある人物を見つめる。その人物は自分を指差して、

「お、オレ……?」

そうこの幻想郷にそんな風貌なのは一人しかいない。そう紅羽こ

ろろである。そして物語は少し前まで遡る。

一週間ほど前の幻想郷、人間の里午前1時、多くの人が寝静まった頃ある一人の女性が家への帰路についていた。その女性が自分の家の前につくと人影が居た。女性にはその後ろ姿に見覚えがあった。

死んだ自分の兄であった。当然ながら女性は疑問に思う、なぜ死んだ兄がいるのかと。そしてふと足元をみると地面が透けていた。それが何を示しているかを理解した時、女性は甲高い悲鳴を上げ気絶した。

これがここ最近幻想郷で話題になっている「死人返り」である。

その事件を発端に一日に数回起こるようになっていた。当然だが異変認定はしたもののかの博麗の巫女はやはりやる気がなくいまだに未解決である。

そして現在の数分前、サチはそれを体験した。

「視た」ものは死んだ祖父。サチはそれに一度呼びかけた。が、振り向いただけで呼び掛けには応じない。どんどん「それ」は近づいてくる。そして屍餅をついているサチに手を伸ばし触れようとしたところで「それ」は消えた。

そして「それ」が最初にいたところに居たのは紅い服の子供、そころろ達くらいなの。そしてサチは一目散に走りだす。恐怖とこの事実をころろ達に伝えなければいけないということから。

そして現在。事件現場。

「さすがにもういないか・・・」

ラツキーはかがみこんで何か痕跡が無いか探している。

「とにかく今日のところは一度家に戻ろう。サチ、また明日来てくれ」

「うん、分かった・・・」

おやすみと一言言ってサチは自分の家の方へと帰って行った。

「で?どうする? 俺らも戻るか?」

「犯人の手掛かりも何もなければ見つけれもしないしな」

「いや、そうでもないぜ」

ころろはにょろとラツキーの肩にポンと手を置き振り向かせる。

「さてお前らには何が視える？」

ころろ達の目線の先、青白い靄がたっていた。そこにいるのは

「親父……………」

「母さん……………」

ラツキーには母親が、にょろには父親が、そしてころろとアルにも同様に両親が視えていた。が、ころろとアルはさらに奥を見据えていた。

「視界共有フィールド・ジョイント」

アルがそう呟くとスペルカードが発動しラツキー、にょろ、ころろにもあるものが視えていた。

紅いパーカーを羽織り、少しハネた黒髪。身長は170近くありそうな「少女」。右目は髪に隠れて見えないが左目はまさに深紅だった。「ざつきから何か寒気がするんで見てみたらこれだ」

ころろは嘆息して言った。

すると少女は左手をかざした。その手は包帯でぐるぐる巻きになっていた。そして青白い靄から無数の霊がころろ達に向かってきた。

ころろ達は各々武器を具現化し応戦するが相手は霊、実体がないため攻撃は当たらない。

「くっ……………お前が犯人か！」

ころろは体を捻って霊たちを振り切り少女に肉薄した。ころろは具現化した短刀「ホオズキ」で切りかかるが何かの障壁に阻まれ刃はあと数センチのところまで止まった。そして少女が口を開く。

「邪魔をするな」と。

その瞬間ころろは吹き飛び10mほど吹き飛びなんとか着地したが既に少女の姿はなかった。

「なんだったんだ……………あいつ」

ラツキーはころろに手を伸ばして言う。

「わからない。でもあいつがこの事件の重要参考人ってことでよさそ

うだな」

「なにか手掛かりがあるの？」

「ああ。アル、お前の出番かもな」

アルは頭にハテナを浮かべていた。が、そんなアルをよそこころろはなにかを掴んだような顔をしていた。

「死人が蘇るっていう伝承は昔からあるだろ？最近だったらゾンビ映画とかの奴だ」

ころろは本棚の上の方にある本を取りページを捲る。

「ゾンビって何？」

「ああ生ける屍のことだよ。ンザンビってアフリカの神様が語源でさあ」

パチュリーは本を捲りながら「ふーん」と一言だけ呟いた。

「興味ないなら初めから聞くなって……」

「興味がない訳では無いわ。でも今はこっちの方が興味深いわ」

「で、名探偵ころろはどの伝承が怪しいと睨んでるのか？」

「初歩的な事だよラツキー君」

本棚の下の方、ラツキーは本を睨んでいる。

「幻想郷に適用されるとすればやっぱり黄泉の国が一番なんじゃないか？」

「黄泉の国？」

ころろはハシゴを降りラツキーに手に持っている本を渡した。

「日本の昔のお話だ。神様であるイザナギとイザナミは深く愛し合っていたが子供である炎の神カグツチを産んだことでイザナミが死ぬ。イザナギはイザナミを取り戻そうと黄泉の国にいきイザナミを見つける。イザナミを連れて帰ろうとするがある条件をつけられる。黄泉の国から出るまでけしてふりむかないでと。イザナギはもちろん従った、が」

「が？」

パチュリーも食いついていた。

「が、イザナミがすっかりついてきているか不安になったイザナギは振り向いてしまった。振り向いたそこには生ける屍とかしたイザナミがいた。イザナギは追いかけてくるイザナミから必死で逃げ黄泉の国の門を二度と開けぬよう門を大岩で塞いだって話。冥界ってよく言うだろ？北欧神話じゃヘルヘイムとも言うしな」

「へえ……確かに結び付きそうだが。じゃあ今回の原因はイザナミ？」

本を本棚にしまいつつころろは「いや」と一言。

「まだ確定じゃない。それにアレは死人帰りというよりは幻霊の類な気がするんだよな」

ころろ達が戦ったあの少女、どこか存在が不透明な気もした。

「とにかく今日も張り込みだな」

「おーいころろ居るかあ？」

「おおおっ!？」

突然呼ばれたころろはハシゴからバランスを崩して本の山に転げ落ちた。

「大丈夫か？」

「あ？ああ魔理沙か……なんか用か？依頼ならしつかりお金もらうからな」

「依頼っていうかこれはあれだな。前までの貸してた分の「お願い」だな」

貸しというのは恐らくころろたちが幻想郷にきてからのことを言っているのだろう。ころろたちがお世話になったのは事実。なので断ることも出来ない。

「で？その「お願い」ってのはなんなんだ？」

「ああ、この子の面倒見てほしいんだ」

「この子？」

魔理沙の後ろにはころろたちと同じ位の歳の少女が居た。片目が隠れるほどの長く艶やかな黒髪、いわゆるモデル体型なのだろう。アールとは違う方面の美少女だ。

「おっほ美人じゃん」

ラッキーが鼻の穴を大きく広げていた。ころろは嘆息しつつ魔理沙に今必要な情報を聞いた。

「えーと……もしかして？」

「ああ、朝起きたらお前らみたいに神社の境内で倒れてた」

また紫の仕業だろう。まだころろたちがきて半年程しか経ってい

ないのに6人目の神隠しとは。

「えーと名前は？」

「え、あつはい！桃園エルです。歳は16歳の高校1年です」
つまりころろたちより1年下という事か。

「分かった……とりあえず預かる。えーと桃園さん」
「エルで大丈夫です」

「じゃあエル、1度俺らの家に来てくれ。詳しい話はそこで聞くから」
「はい」

そしてころろとラツキーはエルを連れパチュリーの大図書館を出て商店へと向かった。

「へえーまた神隠し……それは大変だったわねえ」

「ええまあ……」

アルはお茶を啜りながらエルの話聞いていた。

エルは学生服のまま神隠しにあったようだった。

「エル、今持つてるものって？」

「えーと……」

エルはカバンを漁り始めた。

「携帯に充電器、ゲーム機にイヤフォン、筆箱、スケッチブック、地図ですかね」

「その携帯ずいぶん古いね」

エルのスマホはかなり古いタイプだった。

「え？最新機種ですよ？」

「最新機種……？」

するとエルはスマホのホーム画面を見せた。

「ほら指紋認証に音声認識どれも最新ですよ！」

えっへんと少しドヤ顔気味でスマホを見せてくる。

「高かったんですからア……バイト頑張ったんですよ？」

ころろたちはそんなところに注目していなかった。

「2017年だって……？」

「え？何でそんなところに驚いているんです？」

日常≠非日常の幻想郷と言えどまさかこんな事が起こるなんて。量子力学的な法則で日本国外から幻想郷に来た例もあるが時間さえ超えることがあるとは。

「エル……今は2055年だ。つまり君が来た時間から38年後の世界ってことだ」

「え……そうなんですか?!?!」

驚きが隠せないのも無理はない。ころろたちにとってエルのスマホが古く感じるのは当たり前だったのだ。

「つまりアレか？エルは俺らより37も歳上ってことか？」

「いや別にそういう訳じゃないだろ」

ラツキーの疑問によるは正論を叩き込む。

「量子力学的な効果でヨーロッパから幻想郷に飛ばされてきた子はいたけど……時間を超えることなんてありえるのか……」

「だがそうなると俺らとは別の次元の世界から来た可能性もあるな。ねえエル、君が居た2017年に起きた出来事って何かある？」

「そうですね……」

によるに聞かれエルは自分の記憶を探る。

「あ！年号が平成から変わることが発表されました！2019年に！」

「そうか。なら俺らと同じ時間軸か」

「あのう……さつきから次元とか時間軸とかよく分からないのですが……」

「あぁごめん説明するね」

によるはざつと10分ほどエルに現在自分がどういう状況なのかを説明した。

「つまりこの幻想郷ではあちらの世界での日常はこちらでは非日常、こちらの常識はあちらでは非日常。こっちの世界にはあちらの世界で忘れられた者達が流れ着く。だから吸血鬼も居るし妖怪もいるし魔法使いもいる。で、君はたまたま幻想郷に入る時になんらかの力が加わって本来の時間より未来のこの幻想郷に飛ばされてきたってこと。もつと言えば現状元の世界に戻る方法はない」

「つまり私、元の世界には帰れないんですね・・・」

「まあそういうことになるわな」

その顔に少し陰りが見えたからかアルはやさしく声をかけた。

「大丈夫だよエルちゃん、私達もあちらから飛ばされてきてここ半年くらいここで生活してるから」

まああまりフォローにはなっていないなかったが。

「え、アルさんたちもですか?」

アルはエルに自分たちがどうしてここにやってきたかを説明した。

「じゃあ向こうにある博麗神社にいったら神隠しにあつて幻想郷に来ちゃったんですか!?!」

「そうこれも全て八雲紫って奴のせいなんだ」

「そうなんですか!?!」

「そんな訳だからしばらくエルは私達と一緒に生活する事になるからよろしくね」

「え?は、はい!」

こうしてエルを加えた5人プラス1匹の生活が始まった。

「ところでみなさんは何して生活してるのですか?」

「あれ?言つてなかった?」

「はい・・・まだみなさんの名前とか詳しく聞いてないですね」

アルは自室を少し掃除していた。部屋の数が限られているためエルはアルと同じ部屋で寝泊まりすることになったのだ。

考えてみれば3ヶ月ほど掃除していなかった。スペルカードを習得してからこつち色々な事件があつてまともに片付けなど出来る暇がなかった。

服やら下着やらが床に散らかつていた。はつきりいつてアルは掃除ができない。デスクの上も本やら文房具が山積みになつていた。

「これ終わつたらゆつくり話すね私達のこと」

「あのアルさんお手伝いしましょうか?」

「いや大丈夫よ。後輩の手を煩わせるなんてことしないから・・・きやあつ!?!」

盛大に滑って尻餅をつく。部屋の隅に山積みにもとめてあった服がまた散乱する。

「ううう………エルちゃんやっぱり頼むよお」

「はい！私こういうの得意なので！」

エルが手伝ったことでももの数分で片付けが終了した。

「こんなところですかね！」

「凄いわねエル………」

するとエルは自慢げに

「えっへん！レディたるもの常に部屋は綺麗にしておかねばお嫁に行けないとお婆ちゃんが言っていたのです！」

「うっ………なんか胸に刺さる」

「あの………アルさんそろそろみなさんのお話を………」

「？ああそうだったね。じゃあ」

アルはエルを連れ1回のリビングに降りた。

「えーとまずは私は蒼樹アル。歳は17。スリーサイズは上から83

58 80体重は………」

「そこまでは大丈夫です！」

(アルってそんなにあるのか)

と想ってしまったころろ達であった。

「俺は赤羽ころろ。歳はアルと同じで17。スリーサイズは………」

「要りません大丈夫ですから！」

「あ？あ、そう。得意な事はそうだな射的とか？あ、あとみんなのリー

ダーだ！」

シーンと静まり返る。

ころろはそっとラツキーの顔をみる。

いつからおめーがリーダーになったんだよという顔で睨めつけてきた。

「まあいいや……俺は運がついてついてつきまくる男、黄沢ラツキー。俺と一緒に居ればみんなラツキーになるぜかわいい子ちゃん」

「か、かわいい子ちゃん?？」

「おいラツキーでめえナンパしてんじゃねえぞ！」

「ナンパじゃねえ！俺の好みはもつと低年齢だつての！」

「うるせえ変態！」

するとすつとよろが立ち上がった。

「静まりたまえ君達。レデイの前でそんな醜態を晒すとはなんとも無様。俺は翡翠による。レミリア・スカーレット様にお仕えする忠実なる執事だ！」

「レミリア様の執事ですか？それは凄いですね！」

「ありがとうございます。それ以上は褒めないでくれ。俺が俺でなくなる」

「こいつ……」

おそらくエル以外のその場にいた全員がイラついたであろう。

「これで全員だな」

「ちよつと待てころろ」

ころろは呼ばれた方向を見る。足元。

「俺を忘れてないかい？」

トライはテーブルに上がり自分のことを指さした。

「あ、えーと……あ、ハイハイ」

「本当に忘れてたのかよー！」

コケつと咳払いをして

「俺はトライ。見た目はそのニワトリだがれっきとした人間だ。人間はイケメンだぞ」

「ニワトリが喋った……。アルさん今日の夕飯は唐揚げですか？」

「おい、誰を唐揚げにするって!?!」

と全員の自己紹介が終わったところでころろは自分たちの仕事の話の説明し始める。

「俺達はNikola商店つってな。所謂何でも屋だ。掃除やら店番やら異変解決まで何でもこなす何でも屋だ！」

「何でも屋……異変って何ですか？」

「ああさつき幻想郷がどういふ場所かは説明したよな？」

「ええ」

首を傾げ気味にエルは答えた。

「この幻想郷では向こうにはない魔法も普通にあるし妖怪やら吸血鬼やらの怪物もいる。そいつらによる怪奇現象を総称して「異変」って呼んでるんだ。で、それを解決するのはエルが1番最初に倒れてた博麗神社の巫女である霊夢の仕事なんだがこれがまたアイツが極度の面倒臭がりと来てる。それで君を俺らに会わせた魔法使い霧雨魔理沙が一人で調査したりしてるんだがやっぱり専門じゃないやつだと一人じゃ無理なわけ。なんで俺らも霊夢に来た仕事をかっさらって解決してるってわけ。今もちようど「異変」を追ってる途中なんだよ」

「今起きてる「異変」っていったい何なんですか？」

「死人帰り。死んだはずの人間が蘇ってる。とは言うものの実際は対象の思い出から死んだ人間の記憶を蘇らせて幻影を見せてるのに近いがな。現にアルには何も見えなかった。ラツキーとによるにはそれぞれ家族が見えた」

エルは一生懸命理解しようとしつつも流石に頭が追いついていないようだった。

「その………「死人帰り」の犯人は分かってるんですか？」

「まあ犯人かは分からんが重要参考人になりそうな奴なら居たな。そんな時は俺みたいな赤いパーカーでロングヘアで片目が隠れてて髪色は黒。そうそうちようどエルみたいな……エルみたいな……」

そこまで言った時エルとトライ以外の4人は気づいた。

「え、あのどうしたのですか……？そんなにまじまじ見られると恥ずかしいですよ……」

「なあアイツの容姿ってエルにそっくりだったよな……」

「ああ。確かにこの通りだ。違うのは目手の包帯と目の色くらい……アイツは確か赤でエルは茶色だ」

考える。これはどういう事だと。犯人はエルではない。隠している可能性もあるが何か違う。エルと似て非なるもの、そう考えるのが今は妥当だろう。

「つまりその犯人は私にそっくりってことですか……？」

「ああ。とにかく今日も張り込むぞ」

秋の夜長、丑三つ時の幻想郷は普段の神秘さが身を潜め不気味さが溢れていた。

「寒いな……」

「お前はそももふもふの羽毛で温かいだろうが」

既に張り込みを開始して数時間。一時間ごとに交代しつつ昨晚の商店街を見張っている。

現在の見張りはころろとトライ、エル。

による、ラッキー、アルは体を休めている。

「なあエル、聞いてもいいかな?」

「?何をですか?」

「君が何故幻想郷に来たのかを」

「そうですね……自分でわからないのですなぜここに来たのか」

エルは頭をポリポリと搔きながら言った。

「まあそうだろうな。でも幻想郷に来れたと言うことは少なからずこちらの世界にいたくない理由があるはずなんだ」

事実ころろたちもテロが蔓延するあの世界には少なからず嫌気がさしていたしこんな世界ではないところに行きたいと心の底では思っていた。

「……実はうち代々医者家系で父も母も兄二人も医者なのです
が私はあまり医者にはなりたくなくて……頭もそこまで良い
わけではなく成績も普通だったのですけど親からはお前も医者にな
れてしつこく言われて。もしかしたらそれから逃げたかったのか
もしれないです」

「……エル自身は何になりたかったの?」

エルは少し考えたあとそつと口を開いた

「保育園の先生……ですかね」

「そっか……ッ!!」

ころろはそこで気づく。辺りが霧に覆われ始めているのを。

「来るぞ……」

霧に包まれ妖しげな光が朧気に浮かぶ。

「あつ……父さん……!!?」

「エルそれが幻影だ！本命は更にその奥だ！」

エルが父が見えるという場所の更に奥。エルに似た少女が見える。

「ころろはトライをたたき起こす。」

「トライ、ラッキー達呼んでこい」

「ああ分かった」

「また貴様達か」

唐突に少女が言葉を発する。エルと同じ声。だがどこことなく冷たい。

「あの！何で私の姿を真似てるのですか!?!」

「……それはお前が私に似ているからさ。だから依代にしやすかった。ただそれだけさ」

「似てる？どこがだ黄泉の国の王イザナミ！」

その名前を聞いた瞬間少女は薄く笑う。

「ほうそこまで調べていたか便利屋の小僧。だが今の私はイザナミではない。その名はあの私を愛しているといいながら醜い姿を見た途端に掌を返したあの男に逃げられた時にすてたさ。今の私はヨミである」

「何故黄泉がえりを起こす?」

「人間というのやはり愚かだ。死んだ人間を供養だなんだと言いながら互いに殺し合う。そんな人間に自ら殺した人間の幻影を見せた時の反応といえば……くくく……無様よのう」

深く立ち込める町の中ヨミの笑い声が響く。

「そう。これは我が復讐。我を捨てたイザナギとそうさせた世界への復讐、これはその序幕。ほんの1ページにも満たない戯れ言じゃ」

切れ長なその目は紅く鋭く光る。

「つたく……何で幻想郷にはこんなに自分勝手な神様ばかりなんだ!!神様のお遊びに付き合ってられるほどこちとら暇じゃないんだ！」

「ほう。生みの親の遊びには付き合えぬと？」

「残念だけど俺たちは今反抗期真っ盛りでね！」

虚空から小太刀ホオズキを取り出し引き抜く。

「悪いけどさっさと異変解決させてもらおう！」

「どうやら貴様は黄泉がえりが見えぬようだな。恐怖も感じぬとみた。ならば潰しがいいのあるというもの！」

霧が集まりゴーストのようなものを形成する。

「へえ数で押すのか……神様もセコいやり方するんだな」

「貴様に構っている暇などないのでな。さっさと片付ける」

「なんだ早く終わるのか。せっかく俺たちも参戦しようつてのにな」

「ラツキー！アル達も！」

ラツキーは鉈を構える。

「そんじやまいつも通り行きますか。」

「ああ。リーダー宜しく」

「よし。ラツキー、俺、によろは前線を。アルは後方支援、トライはエールを守れ！」

「一人17体換算だ。いやころろはアイツ一点だから俺とラツキーで25ずつだ」

「楽勝！」

呼吸を整える。多勢に無勢とはこの事か。戦力差は1対10。だがやれる。このメンバーなら。

「よし、Nikoia小隊出撃!!」

「了解!!」

それを影から見守る巫女が居た。博麗霊夢。

「……………」

その目には何が映るのか誰も知らない。

L / R e : t u r n

「まったく何が一人25体換算だ！倒しても倒しても出てきやがる！」
「相手は幻霊だ。実体がないやつには死の概念なんてはいつてこと
だろ」

「二人とも手を動かして!!…………ツ!!二人とも気をつけて！幻霊
に大きな動きがあるわ！これは…………融合してる！」

ラッキー達に霧散させられた幻霊達は1箇所集まり多数の骸骨
が連なった不気味な怪物へと変貌した。

「おいおいいつからここは妖怪横丁になったんだ？」

「そんなの幻想郷が出来てからずっとだろ！」

巨大骸骨の怪物は体中の骨をミサイルのように飛ばしてきた。

「生憎だけどカルシウムは足りてるんだ…………ツ!!」

「冗談はあとにして!!来ます！」

ラッキーはアルの前に立ち放つ。

「祓符「不運連鎖」!!」

マスタースパークに似たそれはここにいる全ての人間の「不運」を
吸収し威力を増す。飛ばされてきた骨を消滅させつつ不気味な怪物
に直進していく。

蠢く「それ」は鈍重な見た目通り避けきれずに直撃する。

「硬い……………」

煙が晴れたそこには微動だにせずそこにいた。直撃した箇所は骨
が木の根のように絡まり合い修復される。

「ちっ…………やっぱ火力が足りない!!アルあいつの弱点は?」

アルは「それ」を「視る」が漆黒の幻霊たちが重なり合い全てをぼ
かしている。

「それが…………複数の幻霊でできてるせいか無数にありすぎて
…………しかもそれは互いの弱点を補うように相性の悪さも克
服して……………」

「つまりいつにや明確な弱点がないってのか……………」

「なら修復される前に叩く!!狂符「狂宴乱舞」!!」

今は夜。敵の戦力は未知数だが今のよろなら文字通り「負けな
い」。

「骨だから当然吸血なんか効くわけねえ……殴るしかねえか!!」
広範囲ではなく一点集中。

「うおおおおお!!」

によるの拳は確実に骨に響いていく。

バギイツツツという鈍い音とともに右腕の骨がゴトツと落ちる。
だが、

「gggggrrrrkkkkkk」

「なっ回復した?」

!!!!!!

失った右腕は他の部位から骨を補給し再生する。それは木が成長
するのを見ているようで。

「gggggrrrr!!」

再生している右腕をムチのようにしならせたきつけてくる。

「なら、何度でも破壊するだけだ!!」

によるは右腕を振りかぶる。的は大きい。外れるはずはない。そ
う、外れはしなかった。

「(なんだこの……!?)」

触れた瞬間わかった。押し負けると。再生した腕はさらに強靱に
なっていた。

触れた瞬間によるは勢いよく吹っ飛ばされる。によるは商店街の
メインストリートを一直線に吹っ飛び壁にぶつかり止まった。

「なんだよ……あれ……」

勢いよく壁に叩きつけられたによるは気を失った。

「による……く、なら!私でも!」

アルは眼の力を解放しようとする。しかしそれよりもはやく鞭の
ような極太の腕がアルを壁にたたきつける。

「がっ……!!」

によるが耐えられなかったものが少女であるアルが耐えられるは
ずもなくそのまま地面に突っ伏した。

「による!!アル!まずい……によるの力で勝てなかったんだ……」

俺の鈍じゃ・・・・・・・・・・」

「どけラツキー!!」

ころろはヨミを振りほどき跳躍する。

「逃がさぬさ!!」

ヨミは包帯に巻かれた右腕から触手のようなものを出しころろを撃ち落とす。

「ぐはっ・・・・・・・・・・」

「ころろさん!!」

「ころろ!!」

ころろはなんとか立ち上がるがなんとか片膝を立て立てる状態だった。

「ころろ、無理すんな!!今は撤退した方がいいわ!!」

「でも、ここで止めないとコイツは・・・・・・・・!!」

足元もおぼつかない状態でもころろはさらに前へと踏み出す。

「諦めが悪い男は嫌いだ・・・・・・・・アイツを思い出すからな・・・・・・・・馬鹿な男よ。死ねっ!!」

触手状の包帯が電光石火の速さでころろを直撃する。はずだった。

「なに!?!」

ヨミの目の前には憎んでいた夫、イザナギの姿があった。ヨミは動揺し包帯は軌道がずれころろはその場に倒れ込み意識を失った。

気がつけばイザナギは忽然と姿を消していた。

「はあ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

ころろの前には息を切らしなんとかその場に立っているエルがいた。その右腕はヨミの眼前にかざされていた。

「小娘・・・・・・・・貴様その力は・・・・・・・・」

「貴方が私と同じモノならできると信じた。それだけ・・・・・・・・です・・・・・・・・」

そしてエルもどつとその場に倒れ込む。

「フン、邪魔をしおって・・・・・・・・」

「そこまでよヨミ。これ以上はその子たちに好き勝手させない」

少女は物陰から出てきてヨミの前に立ちはだかる。

「博麗の巫女……なぜ今になって出てきた？」

「七日後の丑三つ時で丁度300年。アンタは300年に1回こちらに来ては毎度のように幻影を見せ途中で博麗の巫女に阻止されていた。そして今回も伝承通り構えてたら何？いつもより2週間も早いじゃない？何かあると思つて様子見してたらその子らがいい感じに尻尾掴んでくれてね。今回はこの子らに任せようと思つたけどどうやらセコい手を使つてるじゃないさ」

ヨミの顔が曇る。凶星かしらね、と霊夢は言うとその場で腕を組み自分の推理を話し始めた。

「そもそもころろにはタイムアペレイトがあるのになぜ使わないのか、と言うよりかは使えないのよね。どうやらあの子にはあなたの幻影は効かないようだけど実際には深層心理で何も見えてない自分に恐怖している。だから貴方の「切断面」が見えない。その恐怖心でショートレンジでは不利なはずのあなたも圧勝している」

「何が言いたい？」

「貴方はタイムアペレイトを恐れている。自らの大元を絶たれるのを。大元……今回貴方が2週間も早く顕現した訳、それはその子が貴方を引っ張つたからでしょう？」

幻想郷にも神はいるがどれも未だに存命である。死しているイザナミⅡヨミが幻想郷、この世に顕現するには依り代が必要であった。過去に顕現した時も依り代にされた少女が達がいた。ヨミはいつも手始めに自分と波長のあうものを選び乗り移りその娘の人格を破壊しやがて体をのつとる。だが今回の場合は今までと事情が違った。

今回の顕現はヨミの意味ではなくエルの強すぎる器としての力がヨミを引き寄せた。最上級の器が自ら現れてくれた、今までのことを考えればここまで波長の合うものならばこれまでと出せる力が段違いに強い。しかし強すぎる力は反発する。

「エルが幻想郷に来る前生きる意思は弱かった。むしろ消えていた。だが幻想郷に来た時点ではまるで業火のように燃え盛っていた。呼ばれた時点と全く違う状況に貴方は困惑した。そしてその強い意志に阻まれ結果として貴方はエルのガワだけ手に入れられた。でもそ

れは仮初の体。普段の半分も力を出せていないでしょう？だから無差別に黄泉がえりを起こしエルを炙りだそうとした。違う？」

霊夢の出した答えを聞きヨミはしばらく黙り込んでいた。そしてフフフと薄く笑い口を開いた。

「概ね正解という所かな？だが、お前はひとつ重大なミスを犯している。それは私が奪ったのはガワではなくエルの身体そのもの。今そこにいるエルこそ自らを周囲に見せている幻影。魂だけの存在。実態は生霊さ」

「な……それはつまり!!」

「ああ。私が封印されればその娘は完全消滅する」

言われてみればあの時またしかに違和感があった。

一週間前、エルを見つけた時霊夢は魔理沙といつも通り境内でお茶を飲んでいた。

「今日も平和だなあ」

「何も無いのが1番よホント」

だが霊夢はお茶をすすり険しい目で境内を見つめた。

「でも、あと2週間くらいでまた忙しくなりそうだけどね」

その時一瞬目眩のような感覚がしたが視界が元に戻り辺りを見回したがとくに変化は見当たらなかった。だが、何かを見落としているような感覚がして霊夢はお茶をお盆に置き立ち上がりころろ達を始めこれまで幻想郷に迷い込んだ「あちら」の人々が「こちら」に来た時転送されてくるいつもの境内に足を踏み入れる。

「どうしたんだ霊夢？」

「いや何か……いつもと違う気がする」

やはりその場には何も無い。

「気のせいじゃねえのか？」

「そうね……そうかもしれないわ」

そして霊夢は縁側に戻ろうと振り向いたその時勢いよく木の葉が舞い木々が悲鳴をあげる。それは何かを知らせているようにも思えた。

「……今年は何かが違う。どうしてもそう思ってしまった」

言い知れぬ不安を抱え霊夢はお茶を啜った。啜ったあとのお茶には茶柱が立っていた。

「おお、茶柱！・霊夢、いい事あるぜ!」

「いい事ねえ……今は不吉な予感しかしてないけれど……」

今思えばこの時既にエルは居たのかもしれない。こちらに来る過程で見た目ではなく体本体を取られ魂だけのまま。

そしてエルを見つけたのはそれから5日が経った一昨日であった。いつものように境内でお茶を啜っていた。お茶菓子がなくなつたので台所にそれを取りに行つて帰ってきたらそこにエルがいた。名前やどこから来たのかもハッキリ答えられていたので記憶喪失の類の疑いはなかった。ただ霊夢は不思議であつた。なんの気配もしなかつたからである。いくら台所にいたとはいえ物音くらいするしそもそも霊夢は博麗の巫女である。それが何も感じなかつた。魂の欠片さえ。あまりにも突然すぎた。いつもの目眩もなかつた。その後色々考えた末同じような境遇のころろ達に面倒を任せることにしたのである。

「もつと言えば黄泉がえりも私の力ではない。私の力ならば幻影ではなく本物を蘇らせる」

ヨミは包帯の巻かれた腕は見つめて言った。

「それはつまり……今回の黄泉がえりの始まりはエルの方……？ 幻影を見せる程度の能力というわけかしら」

霊夢は自分の後ろに倒れているエルを横目でちらりとみる。意識を集中してみると確かにエルの姿は霞んで見える。はあ、とため息をつくとまた視線をヨミに戻した。

「それで？ 今回もいつも通りの復讐？ よく飽きないわねもう5回以上阻止されているというのに」

「ほう、我が復讐を笑うか博麗の巫女よ。そうだな確かにそうかもしれない。だが飽きないのとは違うな。これは使命であり我が成すべき、いや成さねばならぬことだと信じておる。これは我が壮大なる復讐

劇。愛したものに裏切られた苦しみが分かるか？博麗の巫女よ」

ヨミの口元は歪んでいた。やはり憎しみというのは深く根付くものなのだ。と霊夢は感じた。しかし、

「生憎生まれて此方そういう類の話とは無縁でねえ。愛とか恋愛感情とかそういうの分かんないのよ。でもとりあえずこれだけはハッキリと言わせてもらおうわ」

霊夢はまたふう、と嘆息すると顔を上げヨミを睨む。

「たとえどんなに理由があろうと私の……いや、幻想郷の平和を脅かすことは許さない。それはヨミ、貴方が神であろうと関係ない。死したものが今生きるものに干渉しないでいただきたい!!」

その目は確かに幻想郷を守る博麗の巫女としての覚悟が宿る目だった。

「そうか。ならば止めてみせるのだな我が復讐を。現代の博麗の巫女の実力見せてもらおう」

そういうとヨミは数多の霊たちと共に消えた。ヨミが消えた後には元から何も無かったかのような静けさがあった。

その静けさに残ったのは気を失ったN i k o l a 達。

「つたく……困った嬢ちゃんだぜ。守れって言われたのにまさか守られることになるとはなあ……」

トライは羽を震わせる。何も出来なかつた自分に怒りを覚えた。そんなやり場のない怒りを発散するかのように思いつきり空に向かって鳴いた。

霊夢は空を見上げる。

山の向こうからは真っ直ぐな光がこちらを照らす。気づけばもう空は明るくなり始めていた。

L / Re : FLECTION

目の前で未だ目を覚まさない少年の額の汗を拭い博麗霊夢はため息をつく。

エルは魂だけ、ヨミは見た目だけではなくエルの身体を手に入れている。しかし本来の力はまだ引き出せていない。もし本当の力を取り戻した場合幻想郷は魑魅魍魎で溢れかえるだろう。そんなことになってしまつては博麗の巫女たる霊夢でも手がつけられなくなる。

「残り6日……」

恐らくあと1回は現れるはずだ。本来の日までの6日でエルを融合ないし消滅させに来るはずだ。エルの方も無理に力を行使したせいで魂の波動が弱くなっている。ヨミを倒すにはエルを身体に戻しヨミを追い出しヨミとエルの身体の繋がりをころろのタイムアペイトで断ち切らねばならない。ただその為にはエルがヨミの魂の力を上回る必要がある。タイムアペイトは結果は変えられないが工程を変えられるもの。因果逆転のスペルカード。すなわちエルが体を取り戻すという結果が先にある必要があるヨミとの繋がりを断つのは過程でしかない。次はこちらからではなくあちらから襲撃してくるだろう。そこが最終決戦だ。それまでにエルの魂を、ヨミをも勝るものしにしなければ。霊夢は本来巫女としてこの事態を解決せねばならない自分が何も出来ないことを悔やむ。悔しさに歯をかみ締めていたその時だった。

「うっ……」

ころろが目を覚ましゆっくりと目を開く。

「気づいた？」

「ここは……博麗神社か……痛つ……」

「まだ無理よ寝てなさい。全身打撲よ。むしろ骨折じゃないのが不思議なくらいよ」

それを聞いたころろはへへ……と苦悶の表情を浮かべつつ笑った。

「あの時咄嗟に使ったからなタイムアペイト。大怪我負うのは確定

だったからなるべく治りが早いものに変えたんだ。それでもこんなもんだけど……いててて」

「そう。まあ今回一番ダメージが大きいのは貴方よ。でもいつまでも休ませてる訳にも行かないわ。ヨミを封じるには貴方のスペルカードが必要だからね」

「他のみんなは？」

「ころろの周りには霊夢以外居なかった。」

「貴方が一番最後よ。みんな家に帰ってるわ」

「エルは？」

「魂の衰弱が激しいからね。今は見えてないだけでちゃんと「居る」わ。ただずつと姿を現したままだと波動が弱い現状、すぐに消滅してしまうわ」

「回復はしているが魂の波動までは治癒の力でもどうにもならない。本人の生きたいという意志にかけるしかない。ころろは彼女の心の内の末端を知っていた。彼女が幻想郷に来た原因は「終わりたかった」から。現実には光を見いだせなくなったが為の行動。しかし今、彼女は生きようとしている。」

「……エルなら大丈夫さ。エルなら奴に勝てる。いや、エルにしか勝てない、だから俺は、あいつを……」

「いいからもう少しだけ寝てなさい。せめてスペルカードが使えるくらいまでには回復してもらわないと困るわ」

「そんじやお言葉に甘えさせてもらいますよ……」

「ころろは痛む上半身をもう一度布団に戻す。」

「霊夢はそつと立ち上がると」

「じゃあ私はやる事あるから」

「ああ、ありがとうな」

「……礼には及ばないわ」

立ち去ろうとした霊夢は襖の前で足を止めこちらに一瞥し続けた。

「ただ、私がやるべき事と貴方達が首を突っ込んだ事がたまたま同じだったからよ。利害の一致ってやつ」

「それでも……ありがとう」

「……ええ」

ころろの再度の感謝の言葉を背中で受けて霊夢は居間から出ていった。

ベッドに寝転がり天井を見つめる。

「なあエル、いるんだろ？とりあえず聞いてくれ」

ころろ以外に誰も居ない、いや少なくとも「見えていない」この部屋に「いるはず」の少女に声をかけた。

「ころろさん……」

うつすらとエルが現れ実体化してきた。ころろはそれにおどろき

「あーいいからいいから。謝るとかそういうのは。むしろ謝らなきゃ行けないのは俺らさ。エルに助けられて……不甲斐ない」

「そんなことないです！ころろさんたちがいなくなったら私は……ころろさんたちのおかげで勇気をだしてあの人の前に立てたんです！」

エルの目は少し涙ぐんでいた。それは彼女が勇気を持って決断した証だった。ころろはそつと微笑むと目の前の少女の頭をそつと撫でた。

「……そうか。なんとというかその……その言葉を聞いて安心した」

「安心……ですか？」

「ああ、希望が見えた気がする」

勝てるかもしれない、そう思った。なぜかと言われても答えることは出来ないかもしれない。しかしエルの「勇気」という言葉に掛けてみたくなった。

「あいつから身体を取り返すにはあいつの想いの強さを上回るしかない。あいつのこの世への執着は異常だ。蘇りたいとかそういう類ではなく復讐という名の単なる嫌がらせだから尚更な」

自分を捨てたイザナギへの復讐と言っていた。はつきり言って今ヨミがしている事は八つ当たり以外の何物でもない。やり場のない想いをひたすらぶつけ続けて来ていたのだろう。

「今まで博麗の巫女はヨミを倒さず封印してきた。それは既に死した存在だから」

ヨミに「死」は効かない。だから封印していた。幻想郷の端の岩戸

に結界と御札で封印していると霊夢が言っていた。

「もうこの先もアイツが蘇るのははつきり言っただけだ。だから俺はヨミを”封印しない”」

「封印……しない？」

「思いもよらぬ答えにエルは首を傾げる。

「ああ……ようはな……」

数時間後、

「大丈夫なわけ？」

「ああ、とりあえず歩けるようにはなった」

「ころろは壁にかけてあったパーカーを取り羽織る。霊夢は縁側でお茶を啜っていた。

「で、どうするわけ？ 貴方ヨミを封印しないんでしょう？ 出来るの？」

「霊夢は振り返らずころろに問う。ころろは数秒の沈黙の後霊夢の隣に座り込んだ。

「出来るなんて100パーの保証はないさ。でもエルならそれを可能にしてくれると信じてる」

「でも彼女の魂は衰弱したままよ。今のままではヨミには勝てない」

「確かに、な。でもエルは勇気を得た」

「勇気」、それだけ聞けばとても軽く聞こえるかもしれない。だがエルにとつてはとても重い1歩だ。

「既に死した存在の現世への復讐の感情より”終わろうとしてた”存在の生への執着の方が強いと思わないか？」

「……わかったわよ。貴方たちに掛けるわ。ただし私もしっかりメインをはらせてもらおうわ」

「つまり……？」

「霊夢はお茶をお盆に置き立ち上がる。

「博麗の巫女としてあなた達ニコラ商店に異変解決の支援を依頼します！」

「ビシッところろにむけて人差し指を構える。

「うちは依頼されたら断らないさ。これで貸しもチャラだな」

「あら？ 今回でまた貸しをひとつ作ったからチャラではないわよ」

ははは……と、ころろは頬を搔く。

「かなわねえよお前には」

「それじゃ手はず通りに」

「了解だ。頼んだぞ」

霊夢と握手を交わすところろは未だ重い身体を引きずるようにして仲間の待つ家へ帰る。

「あいつに勝つにやどうすりゃいいんだろうな」

ラツキーは座椅子に腰掛けお茶菓子を食べながら天井を見つめていた。によろはさつきからずつと難しい顔をして椅子に座っている。昔美術の授業で見たロダンの考える人のようだ。

アルはキツチンでお茶を淹れていた。トライは縁側でぼーっと外を眺めている。

「とにかくみんなー回落ち着きましたよ。ほらお茶を淹れましたよ」

「悪いなありがとう」

アルから湯呑みを受け取りお茶を啜る。するとによろが口を開いた。

「なあお前らは幽霊って信じるか？」

唐突なその質問の意味がラツキーにはイマイチ理解できない。

「そろそろ数日で何回か見てるし信じるなって無理な話だぜ……？」

「いやなんというか説明しづらいな」

少し考えてによろは手元にあった湯呑みを手に取る。

「なあラツキー、これはなんだ？」

「あ？そら湯呑みだけだ」

「そうだ湯呑みだ。じゃあアルの方を向いててくれ」

ちようどラツキーの後ろにいるアルの方を指さしラツキーは指示に従い後ろをむく。自然とアルと見つめあう。が、

「あんまりジロジロ見ないでくれるかしらね？」

「悪いな好きで見てる訳じゃないんでね！」

頬を赤らめながら言うアルにラツキーは少タイラツとくる。

「じゃあラツキーこれはなんだ？」

によろはすぐ近くにあった煎餅を手にとった。

「これって言ったって見えないもんは答えようねえだろ……」

後ろを向いているラッキーには当然によろが持つている煎餅は見えない。ラッキーの背中には目はついていないので当然である。

「じゃあこっち向いてみる。ほら」

「煎餅か」

「そう、それだ」

「は？」

と言われてもという表情でラッキーとアルは首を傾げる。

「こんな説がある、世界というのは視界に入ったものだけ存在しているのではないかと。もちろん現実は違うが。前を向いている時後ろは見えない。その瞬間後ろに世界が存在しているとは自分では証明できない」

によろは一口煎餅を齧る。醤油の染みた味がする。

「それは俺らにも言えることだ。今俺の事をお前らが認識していることで俺は俺自身がここに居ると感じられる。存在するためには他人に認識されないといけない」

「あのさあによろ……お前っていつも説明する時凄く遠いところから話し始めるよな……」

「そうか？まあわかった本題を言おう。さつき俺はお前らに幽霊は信じるかと聞いた」

「ああ？そうだな」

「幽霊とか妖怪って類はな」

によろはラッキーの返答を待たずに話を続ける。

「昔の人達が恐怖心に名前をつけたんだ。暗闇に対する恐怖がそこに無いものを作って暗闇ではなく『そこにいる何か』に対して恐怖を抱くようにした。妖怪も同じだ」

「でもさ妖怪も幽霊も幻想郷にやみんないるだろ……？」

「そう、それなんだ。その考え方。俺らはこここの考え方に感化されてしまった。幻想郷は非現実が現実だ。あっちとは違う」

ラッキーとアルは未だ理解しきれていない。

「何かが存在するには他人に認識されること、幽霊や妖怪は人々の信

仰が生み出したもの。だから認識しなければいい。幽霊も妖怪もいないと信じる。ヨミが使うのは幻術、いわば俺らの中の存在を投影するんだ」

そこでアルは理解したようで口を開いた。

「つまりそれって……」

「ああ、そうだ。この戦い方は俺らの『心』を殺して戦わなきゃ行けない。見えたものをもう居ないと、存在してはいないと思いつくことだ」

いないと信じれば幻霊は存在できないのではとよろは考えた。

「幽霊なんていないと信じる……か。なら最初からそう言えって……」

「わるいなこういう話し方しか出来ないんだ」

「まあそれが出来ればあいつはかなり弱体化するな。できればの話だが」

実際問題これはかなり難しい。ここは幻想郷だ。「無い」ものが「ある」。

普段妖怪やら神様を見ているためにそれが普通だと感じ始めている。ラツキーたちももう立派な幻想郷の住民なのだろう。

「霊夢も言ってたがあいつに勝つための鍵はころろとエルだ。俺らが露払いをする必要がある」

「それは分かっている……分かっているが……」

「あの……」

によるとラツキーの会話に割ってはいる少女の声。

「私に考えがある」

赤い瞳の少女、アルだった。

(俺とエルが……鍵になるだろうな……)

歩く度全身が悲鳴をあげている。立つのがやっつとではある。が、そんなことを嘆いてはいられない。時間もそこまで残されてはいない。しかしころろにはひとつ策があった。ころろの体力も回復できエルの魂の力も上げられる方法。それにヨミが乗るかの賭けではあるが。

ふと歩みを止める。気配を感じた。

「エルじゃない……紫だな？」

「よく分かったわね」

木の影から紫が顔を出す。

「まあお前の気配は嫌な感じで分かるからな」

「あら遠慮なしにズバズバ言うじゃない？」

「ころろはふう、と深呼吸すると紫に今まで思っていた疑問をきりだした。」

「お前、今回のこととれだけ絡んでるんだ？」

紫は一瞬きよとんとしたあところろの目を見つめやれやれと言った感じで説明し始めた。

「どうせ私があの子をこの世界に呼んだとか巻き込んだとか思ってるのだろう？だが残念だがそれは見間違いだ。今回の事はほんとに何も関わっていない。正直私の想像以上でもある。まさかアレだけ強力に引き合うとはね」

「お前が一切関わってないだって……？」

「ころろは困惑した表情で紫に聞く

「じゃあなんだ……器が引きあってエルは幻想郷に飛ばされた……？」

「そうよ。彼女がここに来たのもそれによるものよ。無意識のうちつてやつね」

「でも待て……エルは……」「終わろう」としてあっちの博麗神社に来たんだろ？それはあいつの意思じゃ……？」

「そうだ。彼女は終わるためにあちらの博麗神社に来たはずだ。」

「終わるために……？彼女がそうだったの？」

「ああ、そうだ。あいつが話してくれたよ”終わるため”に来たと」「ただいま」

当たり前前のその一言を当たり前前に言える場所に帰ってきた。気づけば夕方になっていた。

「おかえり」

居間に行けばいつもの仲間が待っていた。あれからドタバタして

いて結局ころろの誕生日を祝うための飾つけはそのままになっていた。

とりあえず近くにあった椅子に座る。沈黙が流れる。みな何も口を開かない。こころは深呼吸すると口を開いた

「話が……」

「ころろ、話がある」

ころろが話す前によろが口を開いた。

「お、お？ ああ、なんだ？」

「ヨミを倒す方法だ。アルが話してくれる」

「はい、ヨミを直接倒すという手ではないですけどころろとエルをヨミのところを送り届けるための作戦です」

アルは淡々と喋り始める。アルがこういう喋り方をする時は何か覚悟があるときだ。ころろはそれを推し量っていた。

「さつきによろがああの取り巻きの幻霊たちを見なければ良いのではと言いました。幻霊たちは見ることによって存在すると。逆に見なければ幻霊たちは居なくなりヨミは弱体化する」

「それはそうだがどうやって……？」

「私の眼を使う。この目の力を常時発動してころろ、トライ、エル、による、ラツキーに接続して戦闘してもらいます。そうすれば幻霊は大幅に弱体化しヨミにも近づけるでしょう」

だが、その作戦には欠点もあった。アルの負担が恐ろしくあがる。常時発動ということは目かなりの負担をかける。さらにトリックが分かればアルは一斉に狙われるだろう。

「私がやられる前にみんながやってくれればいいですよ」

「それはそうだが……による、ラツキー、お前らは納得したのか？」

によるはメガネを中指でクイツとあげ

「ああ、それしかない、という結論だ。恐らくそれだけ見えないようにしてもあの巨大な骸骨は充分強い。だが、アルの目を使えば見えなかった弱点が視覚化される。かけてみる価値はある」

「俺もまあ同じだ。正直最大の難関はヨミじゃなくてあの守護してるゴーレムだ。不運連鎖でも削れない」

とは言うもののやはり苦渋の決断のようでラッキーとよるの表情は曇る。ころろはそんなふたりの心情を察して自分の作戦を話始める。

「俺にも考えがある。ただしこれは倒せる手段とかじゃない。倒すために必要な作戦だ」

「

倒すために……?」

アルはイマイチ理解が出来なかったので確認するように聞いた。

「ああ。あいつに果たし状を出す」

「果たし状!」

その場にいたころろ以外と全員が声を上げた。

「果たし状ってお前喧嘩じゃないんだぞ……?」

「いや、これはあいつの八つ当たりが原因の喧嘩さ。何か大義名分がある訳でも無い」

「だが、あいつがそれに応じるのか?」

によるのもつともな疑問にころろは自信ありげに答える。

「応じるさ。あいつは腐っても神だ。プライドは高いしな。こいつで本来の日にち、六日後まであいつの再来を引き伸ばす。そのあいだに俺たちは特訓さ」

「特訓?」

「ああ、今のオレたちでは体力が回復したとしてアルの目で弱点を炙り出してもで決定打にはなりえないかもしれない。だから改めて自分たちの長所を延ばすんだ。その間にエルの気力も回復する」

万全な状態で決戦を迎えようというのがころろの考えだった。みんなもその考えに賛成だった。ころろは筆をとり果たし状を書き始める。

「律儀に墨で書くんだな」

「まあほら一応向こうも神様だしな。多少の誠意は見せた方がいい」
さらさらと書くときそれをトライの口に加えさせた。

「トライ、ヨミはここを現世にいる間の拠点にしていると霊夢が言っていた。ここに放り込んでこい」

「はふぁー(ラジャー)！」

トライはバサバサと羽根を羽ばたかせ縁側から飛んでいった。
その瞬間を一同は見逃さなかった。

「……見たか？」

「ああ、みた。飛んでたなあいつ……」

「ええ、ニワトリのはずなんですけどね」

「進化したのか……」

みんなが困惑していると庭にサチが駆け込んできた。

「おお、サチどうした」

「いやみんなが大怪我したって聞いて！」

ハアハアと呼吸を荒くしたサチの顔は涙ぐんでいた。

「何泣いてんだよお前のせいじゃないって。むしろ仕事持ってきてくれたしな」

「でも……」

「いいか？お前は俺らが帰ってきた時にうまい団子を食わせてくれればいいんだよ。だから心配すんな！」

ころろはサチの頭をポンポンと撫でる。

「もう、ポンポンするな!!子供じゃないんだから！」

「ハッ！俺らからすれば全然子供だよ」

ころろは笑いながらそういうとサチはムウーツ！と頬をふくらませた。

「もう…ころろの団子は激辛にしておくもんね！」

「はっそりや楽しみだ」

サチが来たおかげで暗かった商店も笑顔がもどりつつあった。そしてころろにはまだみんなに話していないことがあった。

「みんな、もうひとつ話があるんだ」

そう、ヨミの封印の話である。

「ああ、だから俺はヨミを封印しない」

「封印……しない？」

思わぬ答えにエルは首を傾げる。

「ああ、ようはな”神は殺せない”。神は人々の信仰によって存在してる。それが受け継がれる限り死ぬことは無い」

だから今まで博麗の巫女は封印という形を取ってきた。あの祠の封印はとても強力だ。しかしそれも無限ではない。最初に現れた時また現れぬようにできるだけ長く封印できるように施したがそれでも300年が限界だった。だからその時の巫女は時間に任せ将来的にヨミを完全に封じられるように未来に託したのだ。

「神を殺すこと、それはつまり民を殺すこと。それがわかっていたんだよ昔の博麗の巫女は。未来に託したはいいけど未だに完全封印には至らない。そんな時だ、今回初めてイレギュラーが起こった。それがエル、君だ」

「ええ、そうですね」

「そして今、今までとは違ってあいつは弱体化している。博麗の巫女が用いた術ではなくても封じられるかもしれない。もしかしたらこのままいけばエル、君は死ぬかもしれない。ヨミに魂の力を吸われたからな。今はこうして多少回復してるが多分長くは持たない。だからヨミから体を取り返して”ヨミで君を補強”する」

「それってつまり……?」

「ああ、君の身体にヨミを生かす」

ヨミとエルはとてつもないほど霊格が似ている。だからこそヨミは引つ張られた。ひとつの身体にふたつの魂は共存できない。しかしエルならばヨミを抑え込み共生出来るのではところろは考えた。

「まず俺のタイムアペレイトでヨミと君の身体のつながりを絶つ。そのあと君を身体に撃ち込む。そのあとはきみの戦いだ」

「そういう事ね。ま、実に貴方らしいけど」

襖を開けて霊夢が入ってきた。

「霊夢、聞いてたのか」

「たまたまよ。で、エル貴方はどうなの?」

「私ですか……?」

そう聞かれたエルは顔を俯かせる。数秒の沈黙のあと口を開いた。霊夢だ。

「このままでは貴方は消滅する。でも身体を取り返すにも貴方がヨミに負ければどのみち消える。消えるか生きるかの2択よ」

「……私は……」

一瞬躊躇う。みんなに言っていないことがある。ここに来た本当のわけ。誤魔化してきた。しかし自分のためにみんな命を張っている。言わなければならない。

「私は……終わるためにここに来ました」

「終わるため……!?!」

エルは遠く空を見つめる。

「もう全部が嫌になったんです。全部投げ出して……これといって友達も居ないし。ちようどあの日親と喧嘩して家を飛び出してそれであの場所に、あちらの博麗神社に行っただんです。私たちの時代では博麗神社は神隠しとか人が行方不明になるって有名だったんです。自殺の名所とかそんな感じでも」

「あつちでもこつちでもろくな評価受けてないのね博麗神社……」

霊夢は少々呆れた。神隠しは当然、紫のせいなのだが奴のせいで向こうの博麗神社の評判も悪いとはとんだ迷惑である。

「やっぱり無意識のうちに引っ張られたということか……」

「強すぎる器としての力が……か」

霊夢はしばしの沈黙のあと続けた。

「それで結局どうしたいの?」

「私は……私は生きます。ここにきて幻想郷の皆さんと触れて吹っ切れました。戦って、戦って勝ってみせます!」

その目には確かに覚悟が宿っていた。霊夢はその目を見てもう何も言うまいと頷いた。

「ならば残りの6日間、まずは回復してそのあとは特訓ね。時間は少ないわよ」

エル自身の身体能力は一般的な10代の女子と変わらない。スペルカードさえあれば多少変わるかもしれないが本来あれは決闘用に作られたもの。ヨミの場合は本当の殺し合いだ。スペルカードで対抗できるかどうか。

「やります……成し遂げてみせます!!」

少女の決意の灯った顔に霊夢は安堵した。

「という訳だ」

ころろが話終えると場は重い空気に包まれていた。当然といえば当然だ。エルが抱えていた闇を知ったわけだ。死というのはとてもデリケートな問題だ。ましてや自らの場合も。親を亡くしたころろたちも人の死の痛みは分かる。しかし自ら絶とうという所まではいかない。その考えに行き着くのは余程のことがその人に取ってあったということ。

「で、エルは霊夢のところで気を高めてる。俺らもそれまでに回復と強化だ」

「エルにそんな過去がね……俺らは避暑して偶然だったけどエルは必然だったわけか……」

ラッキーは天井を見つめてポツポツと呟いた。サチは俯いたまま何も言わずそんなサチをアルはそっと抱きしめていた。

「でもエルはやるって言ったんだろ？それなら俺らは支えてやるしかないだろ？」

「よろはメガネをかけ直して立ち上がる。

「なあ？リーダー？」

「ああ、依頼は最後までこなす。霊夢から正式に依頼もうけたしな。エルの身体を取り戻してあの子が笑顔でここに帰ってこられるようにする。だから俺達も気合い入れていくぞ」

ころろのその言葉にその場にいた全員が同じ気持ちになった。ハラは決まった。

「まずは回復だ。その後は少しでも強くなる、やるぞ!!」

「おお!!」

あたりも暗くなつた幻想郷にメンバーの雄叫びがこだました。

日が短くなり幻想郷にも秋が訪れた。秋の夜長に映える月を岩戸の上で見上げる少女ヨミ。またの名をイザナミ。

「良くこうして2人で月を見上げたものだが」

少しだけ懐かしさに浸るがすぐにイザナギへの想いは憎しみへと変わる。空いと憎しみは表裏一体とも言おう。

死したイザナミを助けにイザナギは黄泉の国へ乗り込んで来たが、いいが途中でイザナミとの約束を破り振り返ってしまふ。そこに居たのはそこに居たのは美しい女ではなくイザナミの形をした腐肉と骨の塊だった。イザナギは恐怖のあまり逃げ出しイザナミは裏切られたことへの怒りとこの姿を見られたことに対する羞恥、そして何より逃げ出したイザナギに対する哀しみであった。

逃げ出さずにそれでも良いと抱きしめて欲しかった。だがイザナギのあの目は化け物を見る目だった。思い出は全て憎しみの糧となりイザナギを追いかけた。しかしイザナギは見事現世まで逃げおかせ黄泉の国への入口を大岩で塞いだ。そしてそれから悠久の時が過ぎたころ、人々の記憶からこの岩戸が忘れ去られ幻想郷の山奥に転移してきた。岩戸という概念と共にイザナミも一緒に。

あちらで忘れられたものたちが流れ着く場所、そんな幻想郷に自分との思い出を忘れ逃げおさせたイザナギを重ね怒りを覚えた。そして幻想郷を破壊すると決めた。それと同時にイザナミの名前も捨てヨミと名を変えた。自分に会う器の年頃の若い女に乗り移り幻想郷を火の海に変えた。しかしそれも当時の博麗の巫女の力で封印された。

そうして何度かの復活と封印を繰り返して眠りについていった。

だがその眠りは意外な形で妨げられた。器が自らやってきてその強大な適合率のおかげでヨミの封印が強制的に解かれたのだ。この好機を逃すまいとし器が幻想郷に移るタイミングで身体を奪った。幸い魂は弱っていたため難なく身体を奪えた。だが誤算と言うべきか身体を奪った反動で元いた魂が外に放り出された。これでは完全に身体のを引き出すことは出来ない。そうして魂を探すついでに幻想郷の住民たちに黄泉がえりをみせ愉しんでいた。何日かしてついにその魂が目の前に現れた。これと戦ったが奴は力をふりしぼりヨミに黄泉がえりを見せてきた。屈辱だった。忘れられた存在とは

いえ仮にも神であるヨミが弱った魂ごときにしてやられるなど。

「次は容赦せぬ。その魂我が掌握し完全に消し去ろう」

くくく……と月夜にひとり笑っていた時だ。上からヒラヒラと何かが落ちてきた。目の前まで落ちてきたところでそれをキャッチする。

「果たし状……あの若造どもか」

器の魂と共にいる少年たち。今回は博麗の巫女ではなく彼らがヨミと戦っている。正直取るに足りない。たとえスペルカードなどという玩具を手にしても所詮人間の子供。神であるヨミには届かない。実際取り巻きの魍魎魍魎共すら苦戦していた始末。

「そんなヤツらが果たし状とは……。笑わせてくれる」

中を開けば6日後、岩戸にて決着をつけると書いてあった。決着、その言葉にヨミは笑いをこらえきれなかった。

「たった6日で決着とな。面白い」

手に纏っていた包帯を少しちぎり冥府の炎で焼き文字を書く。

「おい、鳥持っていけ!!!」

それを上へ投げると先程から上空を旋回していた鳥が啞えに急降下してきた。

「6日間は手出ししないと約束しよう。だが6日後の貴様らの命は保証しない、とな!!!」

包帯をキャッチした鳥はこちらに見向きもせず去っていた。

「見せてもらおう。6日間で人間がどこまで神に迫れるかを」

そうしてまた静かになった月夜を岩戸の上で見上げる。

「ほれ例の神様嬢ちゃんからラブレターだぜ」

バサバサと羽を飛ばたかせトライは縁側に着地する。もう誰もこのニワトリが飛んでいることには突っ込まなかった。面倒くさそうだからである。

「なんだ神様嬢ちゃんって」

至極真つ当な疑問をラツキーは口にする。

「神様で身体はエルなんだから嬢ちゃんだろ？」

とよく分からない理論をトライは自慢げに話す。聞いた俺が馬鹿
だったと言うふうにはハイハイそうですねとラッキーは適当に返す。

「よし、これで時間はできた。今は寝て明日から備えるぞ」

「了解！」

こうしてnikola一世一代の大勝負が始まった。